

第2節 教育学部構内H-19区の発掘調査

1 調査目的および経過

調査地区は大学キャンパスの西側、吉田遺跡調査団旧調査区でいう北区にあたり、昭和42年の発掘調査で検出された弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡十数基、土壌、溝等の一部が現地保存されている遺跡保存地区の北西約50mに位置する(Fig.3, PL.2-①)。本地区への教育学部講義棟新営に伴い昭和56年3月16日から26日まで約10日間試掘調査を行なった。

調査当初よりこれらと相関する遺構、遺物の埋存が予想されたため新営予定地内西部と南部に幅2mの直交する2本のトレンチを設定し土層の堆積状況ならびに遺構の有無を観察した。この結果、弥生時代後期の竪穴住居跡をはじめとして土壌、溝、柱穴を確認した。これを受けて他の予定地内全域にトレンチと併行して設定した3m方眼のグリッドにより遺構の有無および分布範囲の把握に努めた。東部では排水管理設工事その他により幅1mから2m、長さ15mにわたって破壊されていたものの、縄文時代の土壌、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡、土壌、溝、柱穴および歴史時代の溝が全域にわたって埋存していることが確認された。

上記の所見にもとづき新営工事予定地全域約400㎡について昭和56年4月13日から7月18日までの約4ヶ月間発掘調査を実施した。

なお、腐蝕土および構内造成時の置土は機械を使用して排除した。また、試掘調査の段階で未検出であった1号住居跡および8号土壌西側部分については遺構としての完結性を重視し調査区域を拡張して調査を行なった。

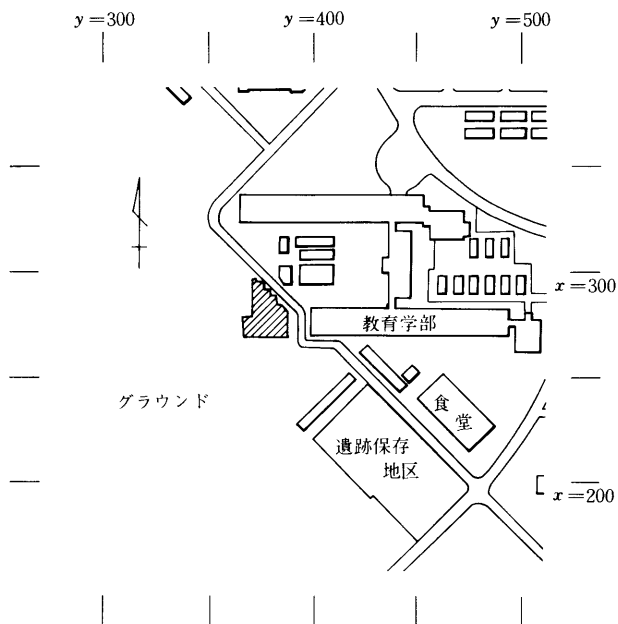


Fig. 3 調査区位置図 (3600分の1)

2 層序

調査区域の現地表面の標高は約18.80mで地点により堆積状態に差異はあるがほぼ平坦である。現在はラグビー場として活用されており、東側および北側を走る道路より約10cmから50cm低くなっている。

遺構が検出される地山面までの層序は8層に区分される(Fig.4)。すなわち、上位から第1層：腐蝕土層、第2層：構内造成時の置土、第3層：暗灰色砂質土層、第4層：黄灰褐色砂質土層、第5層：褐色粘質土層、第6層：黄褐色微砂土層、第7層：灰褐色砂質土層、第8層：茶褐色粘質土層となっている。第1層はラグビー場設営の際の化粧土等を指し、第2層の攪乱土層とは便宜上区別した。第2層は調査区域内全域にみられるが、東部、北部は約40cmの堆積で西部、南部にくらべて約20cm厚く置土を行なっている。第3層は水田耕作土であり2枚の水田を確認した。大学移転前のキャンパス内には水田が営まれており、 $x=295$ 、 $y=342$ 付近から $x=307.5$ 、 $y=359.5$ 付近を結んだ北西への落ち込みラインは現在の学外の水田地割と一致している。第4層はいわゆる床土で5cmから10cmの堆積を示し、D-D'において第3層との整合関係をとらえることができる。第5層は南西部においてわずかにみられる程度で遺物は包含していない。第6層は褐色粘質土がブロック状に混入しており、第5層と同一層に取扱ってよいのかもしれない。第7層は調査区中央部に集中して堆積しており、縄文時代晩期の条痕文土器を包含していた。第8層は砂礫を若干含み所々に堆積している。地山は宇部火山灰層と呼ばれるややシルト味を帯びた黄褐色粘質土であり、中央部および北西部においては砂礫層となっている。調査終了後に調査区南壁に沿って幅50cmのトレンチを設定したところ黄褐色粘質土は砂礫層の上位に堆積していることが確認された。

調査区内は近世以後かなり削平を受けているものと思われ、竪穴住居跡は数cmの壁高を残すのみであった。遺構上面の標高は南東部で18.40m、一段下がった北西部では18.20m前後で両地区ともほぼ平坦であるが、溝6でみると北西部におけるその深さが南東部にくらべて深く、また、約20cmの比高を考慮すると遺構が営まれた時点では南東部から北西部あるいは東部から西部へ緩やかに地形が傾斜していたことを窺わせる。このことは、本調査と併行して約20m西方で実施したラグビー場ポール移設工事に伴う立合調査で地山は少なくとも現地表面から約1.2m下部まで確認されていないことから推察される。

3 遺構と遺物

検出した遺構は竪穴住居跡、土塋、溝、柱穴である(Fig.5, PL.2-(2), 3)。

教育学部構内H-19区の発掘調査

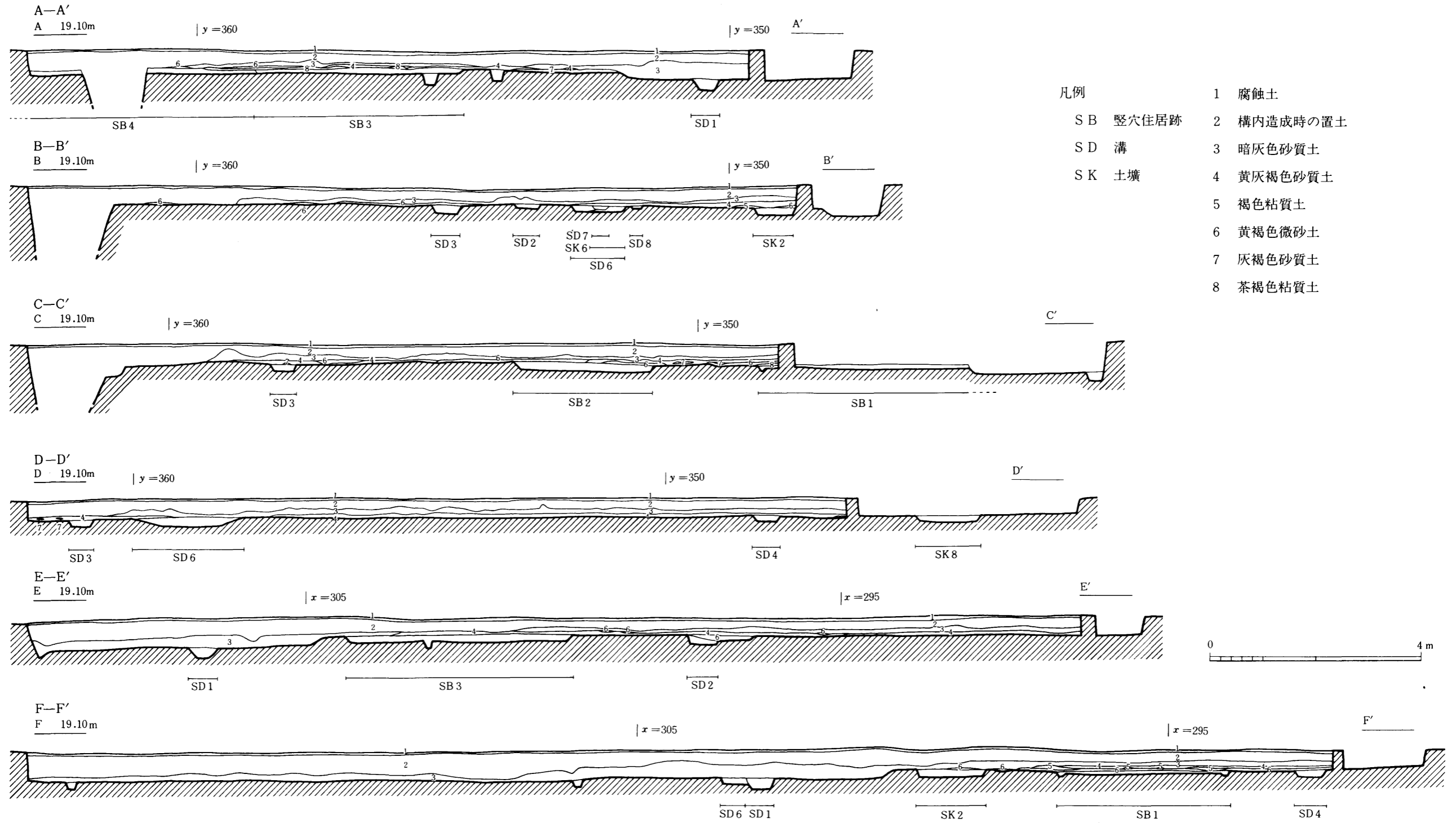


Fig. 4 土層断面図

遺物と遺構

調査区域内北西部は削平によりわずかに溝と柱穴を検出したにとどまったが、その他の地域においては遺構床面まで削平を受けておらず、比較的濃密な遺構の分布状態が確認された。

以下、各遺構および出土遺物について順次詳述することにする。

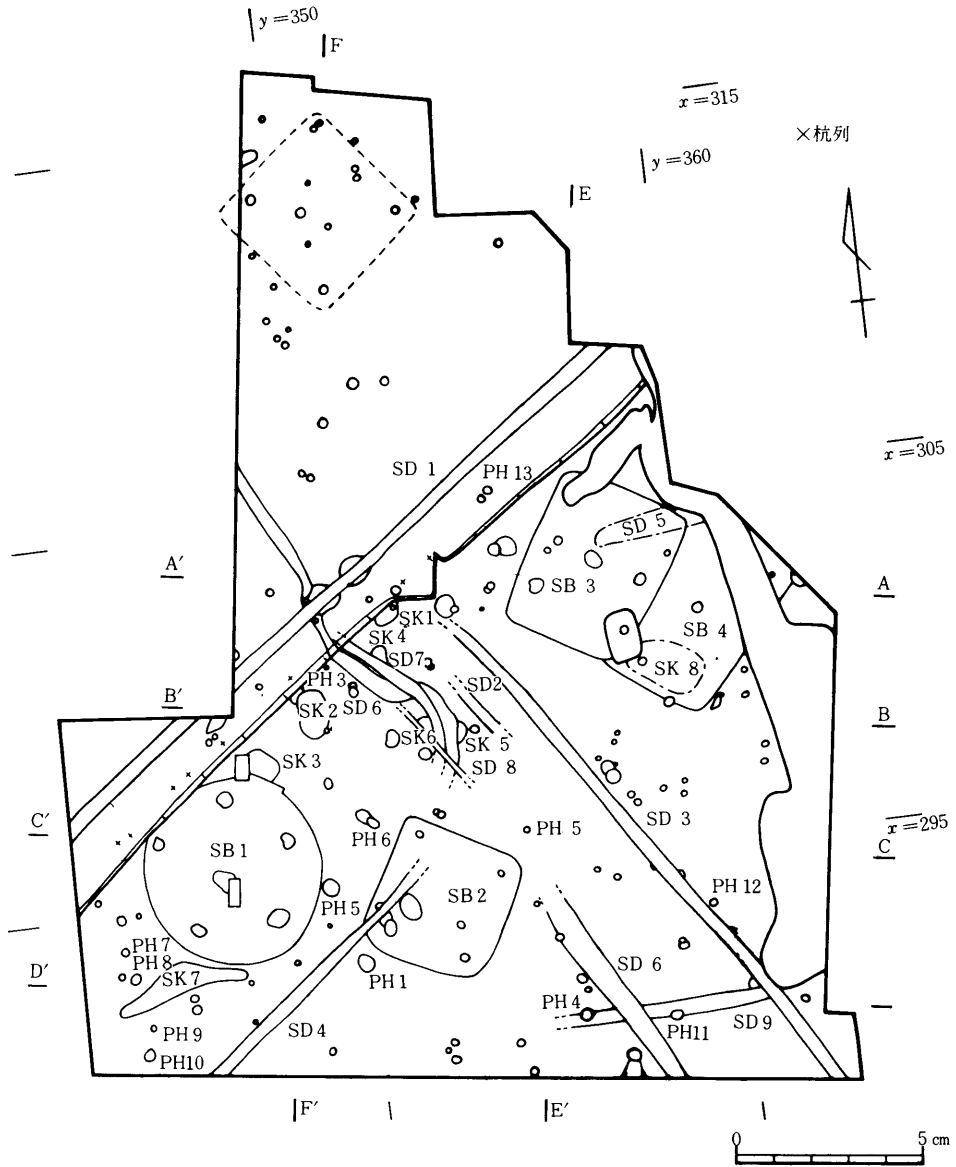


Fig.5 遺構配置図(200分の1)

(1) 住居跡

1号住居跡

調査区内南西隅において検出された住居跡である(Fig.6, PL.4~5)。土壌3を切っており、北西部の一部は水田造営の際に削平を受け消失している。平面形態は円形で径4.95m、床面積19.2m²の規模をもつ。⁽¹⁾床面には5本の主柱を有し、柱間はP1-P2が216cm、P2-P3が246cm、P3-P4が246cm、P4-P5が222cm、P5-P1が220cmである。炉跡と思われる70cm×44cm、深さ18cmの楕円形の掘り込みは南部に偏在し、内部に炭化物および焼土

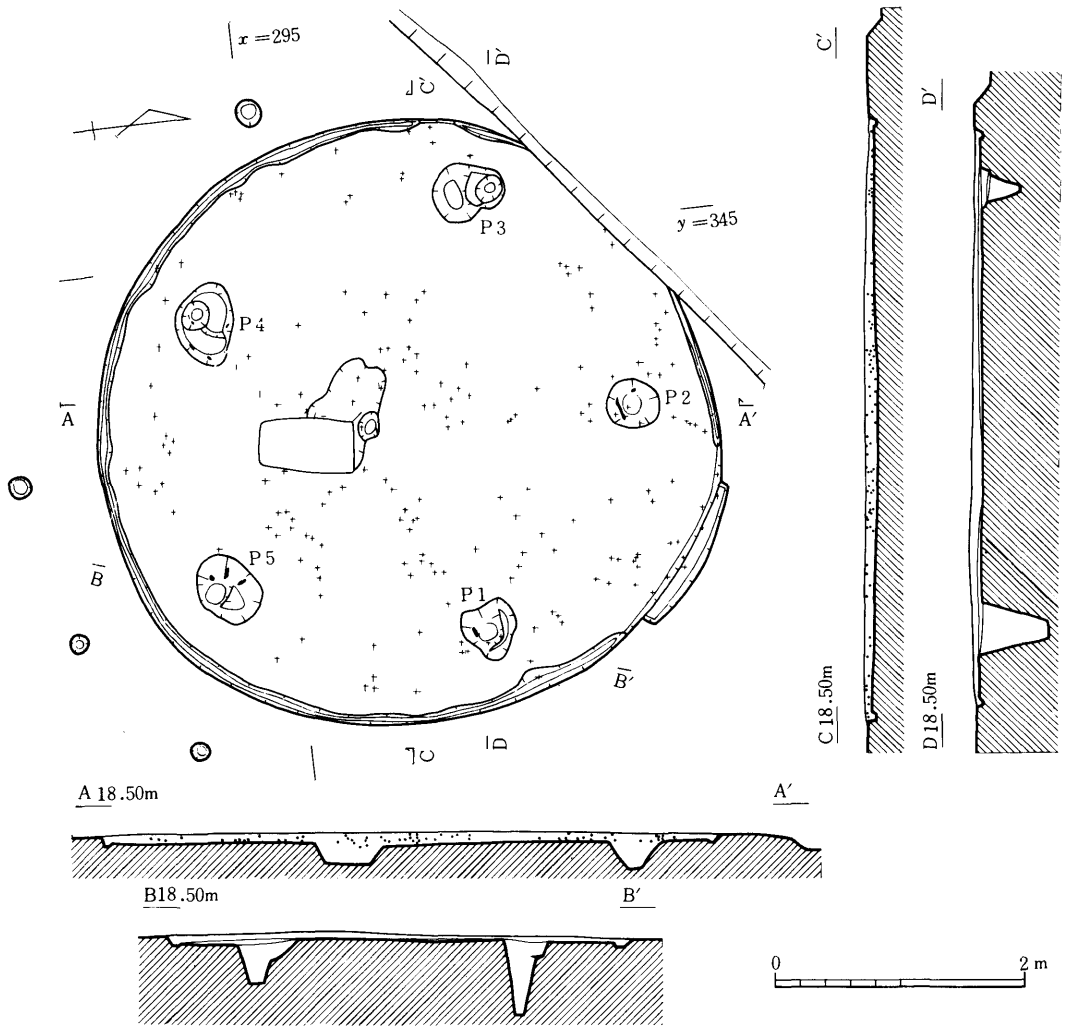


Fig. 6 1号住居跡実測図(1/60)

遺構と遺物

粒子が認められた。周壁は床面から6cm残存しており壁下には幅6~20cm、床面からの深さ3cmの壁溝がめぐっている。

また、北部では周壁に沿って幅15cm、長さ120cmにわたって外方へ弧状に張り出した階段状のテラスをもち、階段部分は堅く踏みしまっていた。出入口として

の機能をもつものかもしれない。なお、このテラス状の施設および西部の一部では壁下に壁溝は検出されなかった。

さらに住居跡の南側約60cm外方には径16~20cm、深さ15~20cmの4個の垂直に穿たれた柱穴を検出した。

住居跡内には黒褐色土が充填しており、壺、甕、高坏等の弥生式土器が床面から若干浮いた状態で出土した(Fig.7, PL.37-①)。1・2・3は短く内湾ぎみに外反する甕の口縁部である。1は口径22.0cmで口唇部はやや尖りぎみに終る。胎土は微砂粒を含むものの良好。内外面とも灰橙色を呈し、焼成は良好。2は口径20.2cmで剥落が目立つ。外面は横ナデに

Tab.1 1号住居跡主柱穴計測表(単位:cm)

要素		柱穴番号				
		P 1	P 2	P 3	P 4	P 5
平面形態		不整五角形	円形	不整楕円形	楕円形	楕円形
径	上面径(長軸×短軸)	44	43	57×33	64×47	57×46
	底面径	14	18	15	12	17
深さ		59	22	34	39	38
中心からの距離 ²⁾		197	189	186	174	210
周壁からの距離 ³⁾		48	59	39 (51)	46 (50)	43
備考		2段掘り		2段掘り	2段掘り	2段掘り

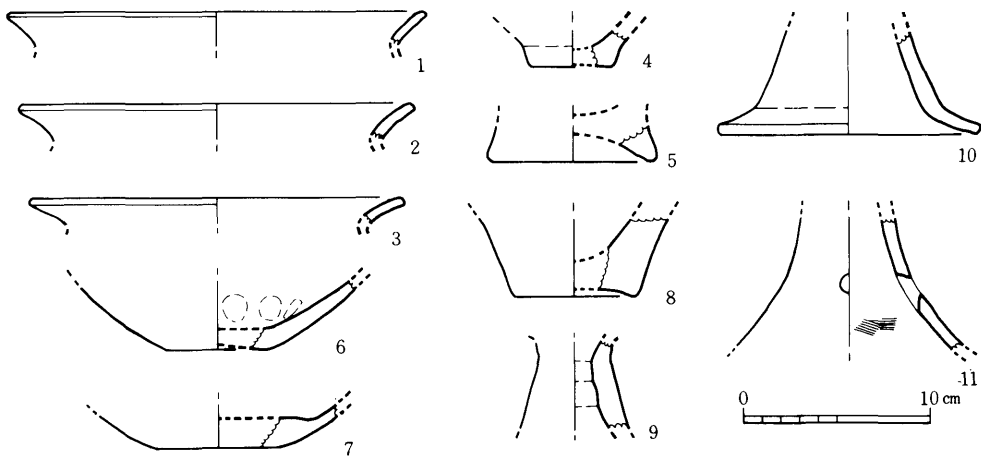


Fig.7 1号住居跡出土遺物実測図(1/4)

より若干段がつく。胎土精良、灰橙色を呈し焼成は軟質。3はほぼ均一の器肉をもち口径19.6cm。胎土不良で焼成は良好。外面黒褐色、内面灰橙色を呈す。1～3とも調整は横ナデ。4・5は甕の底部である。4はやや上げ底で内面への粘土の貼りつけによって胴部へ移行する。胎土良好、焼成甘く淡赤褐色。底径4.2cm。5も底径8.4cmの上げ底の底部で胎土、焼成とも良好。外面灰橙色、内面黄褐色。両者とも横ナデによる調整。6～8は壺の底部。6は内面に指圧痕が明瞭に残る。胎土、焼成とも不良で外面赤褐色、内面暗褐色。7は剥落著しく調整は不明。しっかりした底部から器肉の薄い胴部へ急激に移行する。胎土、焼成とも不良で外面黒色、内面灰橙色。8は大形品の底部であろう。9～11は高坏の脚部である。10は下半部で屈曲し直線的に上方へ伸びる。胎土良好で暗茶褐色を呈し焼成は堅緻。11は焼成前の内面からの穿孔がみられる。外面は不明であるが、内面は刷毛目仕上げである。胎土、焼成とも良好で赤褐色を呈す。

出土遺物はおおむね弥生時代後期の特徴をもつものが存在する。

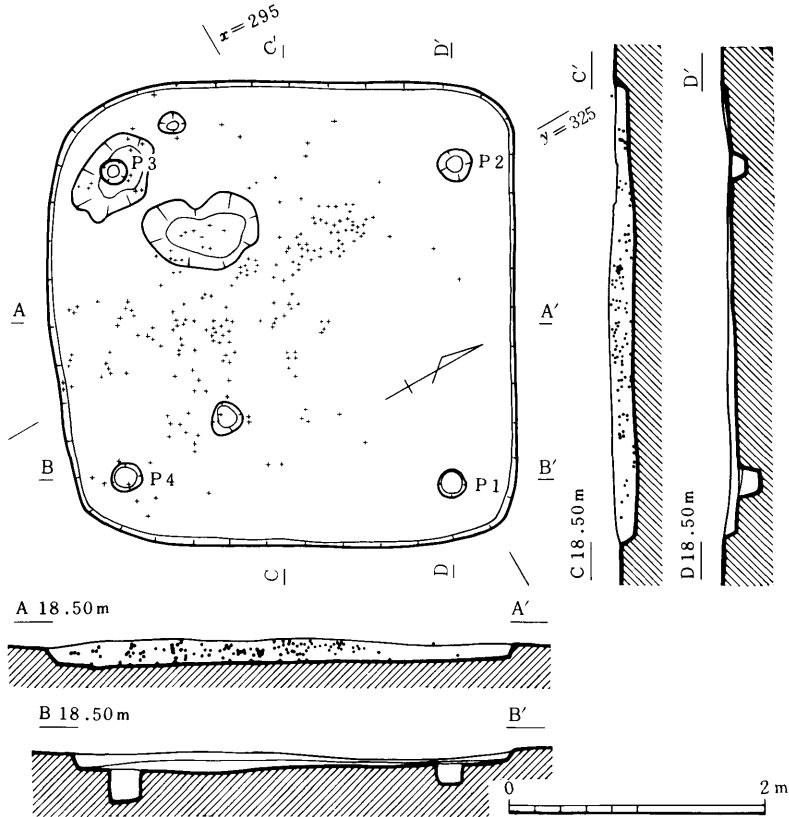


Fig. 8 2号住居跡実測図(1/60)

2号住居跡

調査区内南部で検出された住居跡で、1号住居跡の東約1.5mに位置する(Fig.8, PL5~6)。溝4によって南西隅を切られているが、溝底は住居跡床面まで達していない。平面形態は南辺がやや胴張りの隅丸方形である。規模は一辺3.56m、壁高15cmで床面積は12.7㎡である。支柱はP1~P4の4本であろう。柱間距離はP1-P2が245cm、P2-P3が

Tab. 2 2号住居跡支柱穴計測表(単位:cm)

要素 \ 柱穴番号		P 1	P 2	P 3	P 4
正面形態		円形	円形	円形	ほぼ円形
径	上面径 (長軸×短軸)	22	26	20	25×22
	底面径 (長軸×短軸)	17	12	12	20×17
深さ		16	17	19	26
中心からの距離		183	172	172	180
周壁からの距離		41 42 南辺 東辺	60 43 北辺 東辺	54 40 北辺 西辺	39 36 南辺 西辺

268cm、P3-P4が233cm、P4-P1が252cmである。壁溝および床面の焼痕は認められない。

また、中央からやや西寄りに長軸90cm、短軸44cm、深さ15~20cmの楕円形の掘り込みを検出した。

遺物は黒褐色覆土中より床面から浮いた状態で、おもに住居跡内西半分において壺、甕および紡錘車等が出土した(Fig.9, PL. 37-(2))。1~4は甕である。1は内外面とも刷毛目調整を行ない「く」の字口縁をもつ。口縁部内面は横刷毛仕上げののち、ナデ消している

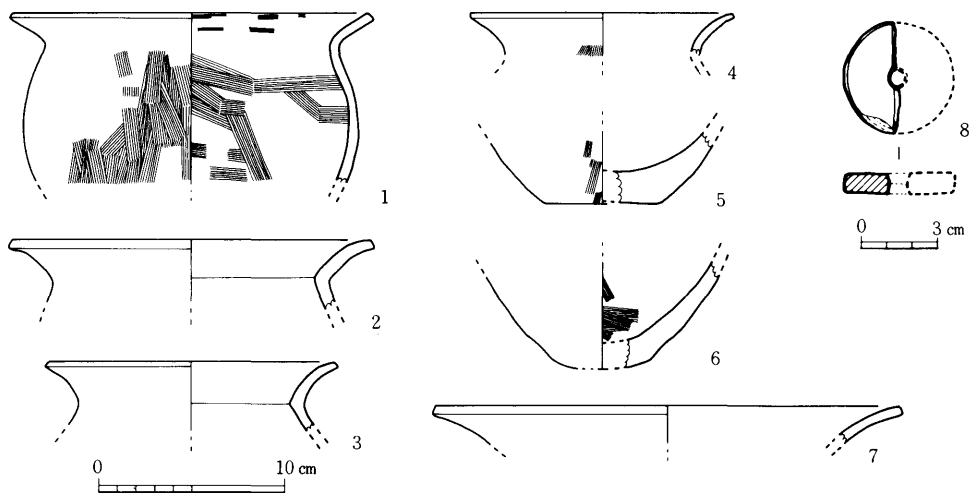


Fig. 9 2号住居跡出土遺物実測図(1/4)

教育学部構内H-19区の発掘調査

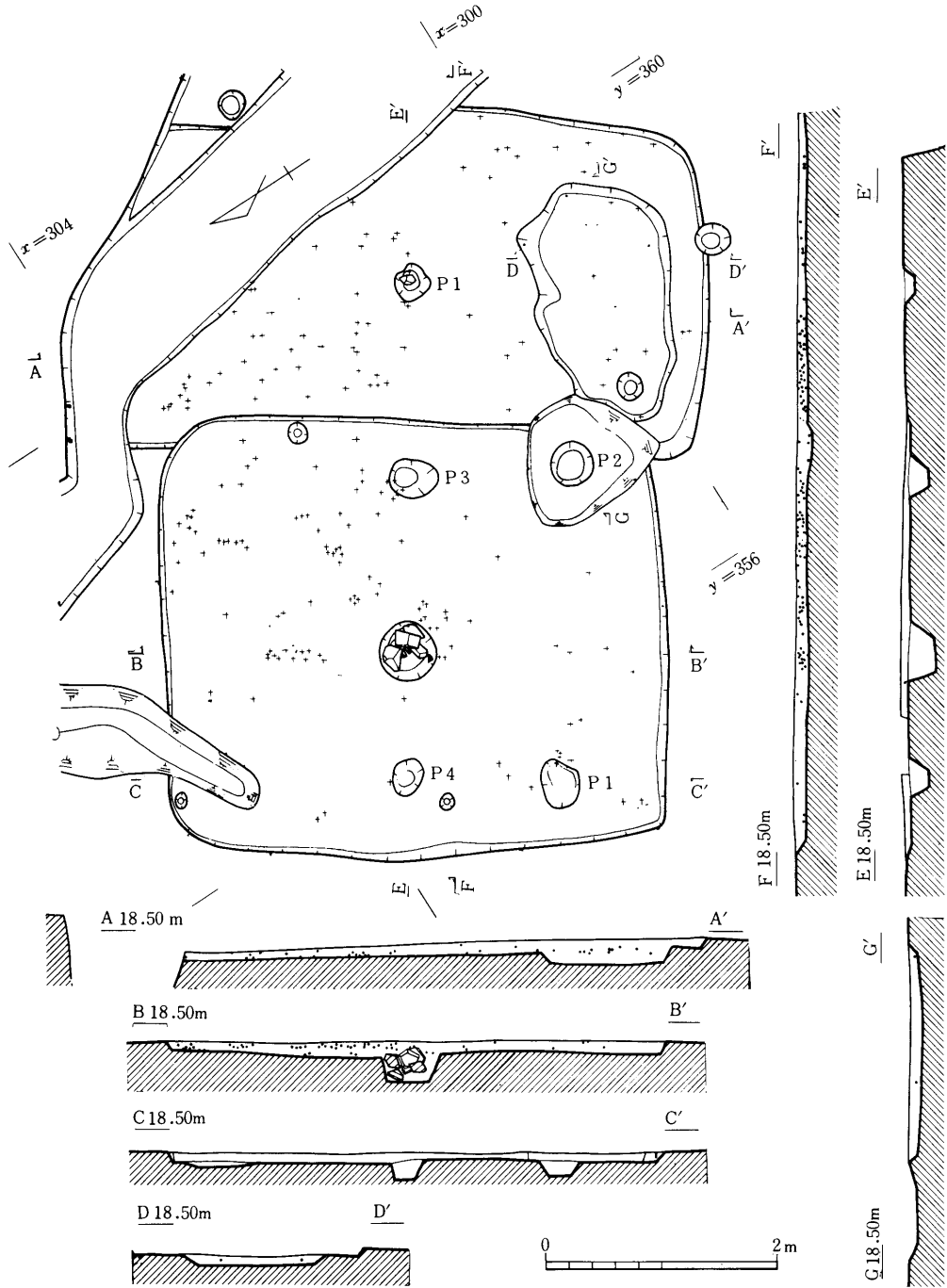


Fig.10 3・4号住居跡実測図(1/60)

遺構と遺物

る。口縁端部は平坦である。口径18.6cm。濁黄褐色を呈し胎土、焼成は良好。2・3・4は張りの強い胴部に「く」の字口縁をもつ甕である。口縁端部は平坦なものとは尖り気味のものとがある。2は胎土、焼成とも普通で外面灰褐色、内面暗灰色を呈す。口径19.2cm。3は胎土精良で外面濁赤褐色、内面灰褐色を呈し焼成は軟質。口径15.0cm。4は胎土、焼成とも良好で外面濁黄褐色、内面赤褐色。口径14.0cm。5・6は壺の底部でやや上げ底のものと丸底気味の不安定な平底のものがある。5は内面ナデ、外面刷毛目仕上げ、6は内面刷毛、外面ナデ仕上げである。7は高坏の坏部で口径24.6cm。胎土精良、赤褐色で焼成は甘い。8は凝灰岩を素材とした紡錘車である。径4.3cm、孔径1.0cm、厚さ0.8cm、重さ9.5g。

これらの遺物は弥生時代後期の
もので前半のものかと思われる。

3号住居跡

調査区内の東部中央付近で検出された住居跡で、北辺の一部および南東隅は後世の掘削で失われている(Fig.10, PL.7~8)。平面形態は長方形で4号住居跡、溝5を切っている。規模は南北辺4.33m、東西辺3.70mで壁高は8cm残存している。床面積は16.0m²。住居跡に伴うのはP1~P4の4本であろうが北辺の状態からみて6本の可能性もある。各柱間の距離はP1-P2が268cm、P2-P3が152cm、P3-P4が256cm、P4-P1が135cmである。住居跡内中央部に約20cmの大きさの礫を充填した径50cm、深さ22cmの円形の掘り込みが検出されたが明確に炉跡と判断しうる痕跡はない。壁下に壁溝は

Tab. 3 3号住居跡主柱穴計測表(単位: cm)

柱穴番号		P 1	P 2	P 3	P 4
要素	平面形態	不整形 橢円形	円形	楕円形	楕円形
径	上面径 (長軸×短軸)	43×34	38	41×33	33×24
	下面径 (長軸×短軸)	29×21	22	19×16	16×14
深さ		16	16	18	19
中心からの距離		177	189	120	129
周壁からの距離		49 82 西辺 南辺	29 65 東辺 南辺	43 東辺	59 西辺

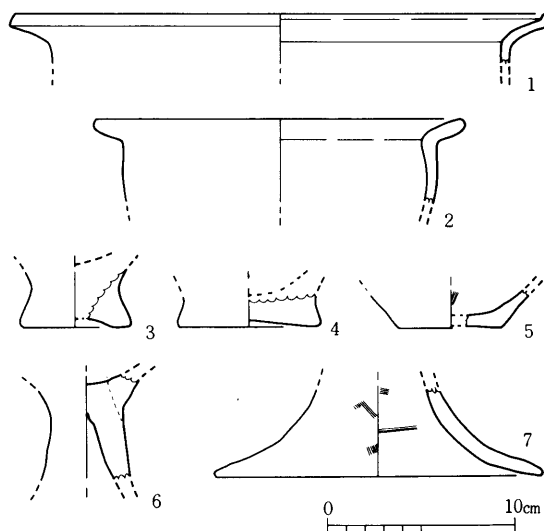


Fig.11 3号住居跡出土遺物実測図(1/4)

認められなかった。主軸方位はN-29°-Eである。

遺物は黒褐色を帯びた粘質の覆土から弥生式土器の小片が床面より高い位置で散発的に出土した。図示しうるのは壺、甕、高坏の7点である(Fig.11, PL.38-①)。1・2は甕の口縁部。1は内面横ナデにより跳ね上げ状の口縁部をもち口径28.0cm。2は張りの弱い胴部に肥厚する口縁部をもつ甕である。口径は19.4cm。1・2とも胎土不良、灰褐色を呈し焼成は良好。3・4は上げ底の甕の底部。磨滅著しく調整は不明。両者とも胎土不良で焼成は良好。3は淡橙色、4は淡赤褐色を呈す。5は鉢の底部かもしれない。やや上げ底気味で、内面刷毛目仕上げである。6・7は高坏の脚部である。6は坏部を脚部側面に接合している。胎土精良で淡橙色を呈し焼成は普通。7はゆるやかに裾が広がり尖り気味の端部をもつ。内外面とも刷毛目仕上げである。胎土、焼成とも良好で濁黄褐色を呈する。

出土遺物はそのほとんどが接合不可能であり、大半が流れ込みのものと思われるが、弥生時代中期後半を上限とすることができよう。

4号住居跡

3号住居跡の東傍に位置し、溝5・土塙8を切り3号住居跡によって切られている。北東部および南西隅は後世の掘削によって消失している(Fig.10, PL.7~8)。平面形態長方形の住居跡と推定され南北辺4.86m以上、東西辺2.72mの規模をもつ。主軸方位はN-35°-Eである。床面は東から西にわずかに傾斜しており壁高は平均10cm残存している。住居跡内に柱穴は2個検出されたが、主柱と思われるのはP1である。床面に焼痕は認められなかった。

遺物は床面からの出土が多かったが、図示しうるのは甕の口縁部1点だけである(Fig.12, PL.38-②)。口径28.0cmで口唇部は平坦である。胎土、焼成とも普通で橙褐色を呈する。

(2) 土塙

1号土塙

調査区のほぼ中央、1号住居跡と3号住居跡の中間に位置し、水田造営の際に北側を削平されている(Fig.13, PL.8~9)。平面形態は楕円形になろうかと思われ、規模は南北軸推定

Tab.4 4号住居跡主柱穴計測表(単位:cm)

要素		柱穴番号	P1
平面形態			不整形
径	上面径 (長軸×短軸)		33×30
	下面径 (長軸×短軸)		17×13
深さ			13
中心からの距離			不明
周壁からの距離			249 南辺

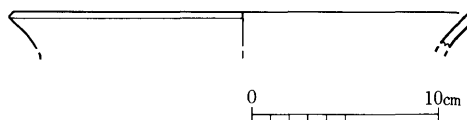


Fig.12 4号住居跡出土遺物実測図(1/4)

53cm、東西軸80cm、深さ18cmである。東壁は上面から床面に垂直に下降している。

遺物は内部に充填した黒褐色粘質土から中央部分に集中して壺・甕等が出土した（Fig.15, PL.38-（4））。1は張りの弱い胴部に「く」の字に短く外反する口縁部をもつ甕で口径17.0cm。遺存状態悪く調整不明。胎土不良で赤褐色を呈し焼成は軟質。2～5は壺。よく開いた口縁部をもち、上下（2）あるいは下方のみ

（3）に拡張した口唇部に3条乃至2条の不明瞭な凹線を施すものがみられる。2は口径18.2cm。胎土は粗い砂粒を多く含み不良で橙褐色を呈し焼成は良好。3は口径18.4cmで胎土精良、橙褐色を呈し焼成はやや甘い。2・3とも内面は横ナデにより仕上げ、外面は剥落著しく調整不明。4は内面刷毛目調整を行なう。胎土、焼成とも良好。外面橙褐色、内面濁黄褐色。5は球形の胴部にやや上げ底の底部をもつ。胴部外面下半は篋磨き、上半は左上がりの平行叩きを施す。内面はやや粗い刷毛目調整のちナデている。外面橙褐色、内面黒色で焼成は良好。胎土には砂粒が目立

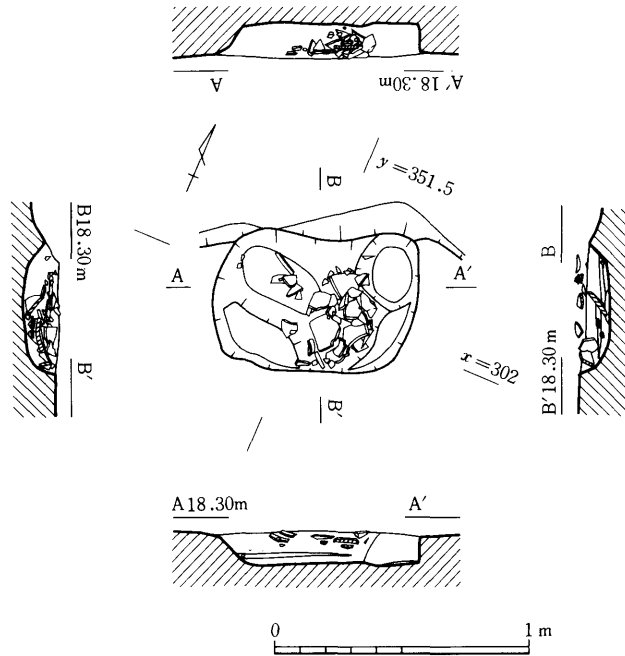


Fig.13 1号土坑実測図(1/30)

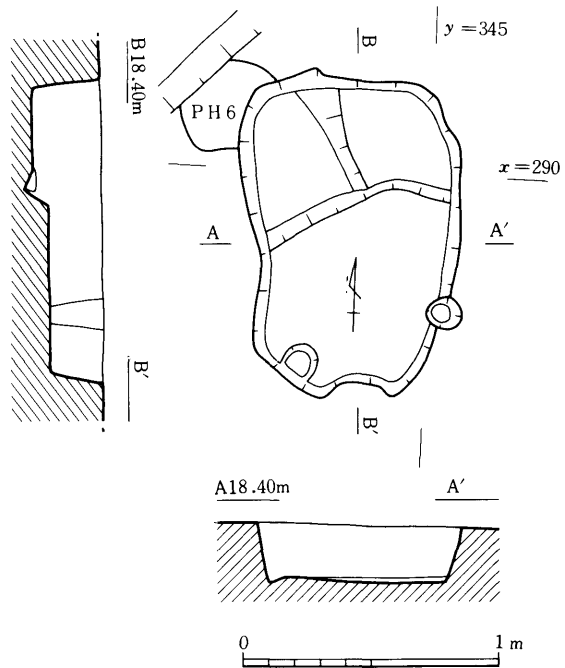


Fig.14 2号土坑実測図(1/30)

ち、金雲母を含む。弥生時代後期前半に属する。

2号土壌

1号住居跡の北東約2mに位置する(Fig.14, PL.10~11)。平面形態は不整形な楕円形で、南北軸117cm、東西軸80cmの規模をもつ。床面は南から北へ階段状に下降しており、最浅部の南側で深さ21cm、最深部の北西側で深さ29cmである。

覆土は黒褐色粘質土で弥生式土器二十数片が出土したが、いずれも図示不可能な破片ばかりであった。

3号土壌

2号土壌の南西1.50mで検出された土壌で、1号住居跡によって南側を切られている(Fig.17, PL.11~12)。円形に近い方形の平面形態を有し、南北軸104cm、東西軸108cm、最深部での深さ44cmの規模をもつ。西壁は床面から緩やかに立ち上がる。

覆土は2層に分層され内部から弥生式土器が出土したが床面付着のものはない(Fig.16, PL.39-(1))。1は上層の黒褐色粘質土から出土した壺の底部である。内面および側面に指圧痕が認められる。胎土精良、外面赤褐色、内面濁黄褐色を呈し焼成は堅緻。前期末に属するものかと思われる。2は下層の褐色粘質土よりの出土である。「く」の字状の口縁部を

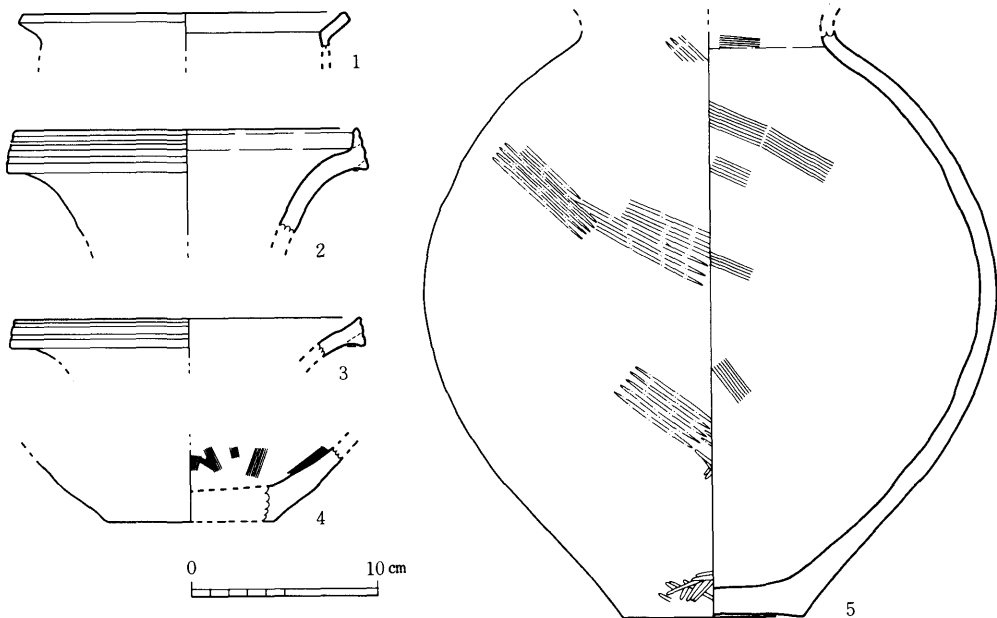


Fig.15 1号土壌出土遺物実測図(1/4)

もつ襷で外面粗い刷毛目調整、内面
 篋削りののちナデている。黒褐色を
 呈し胎土、焼成とも良好。中期後半
 のものであろう。

4号土壌

1号土壌の南傍で検出された土壌
 で、溝7によって切られている（F
 ig.19, PL.13）。平面形態は南北に長
 い楕円形で南北軸55cm、東西軸42cm
 を測る。上面の削平が著しく最浅部
 3 cm、最深部 7 cmの深さを残すの

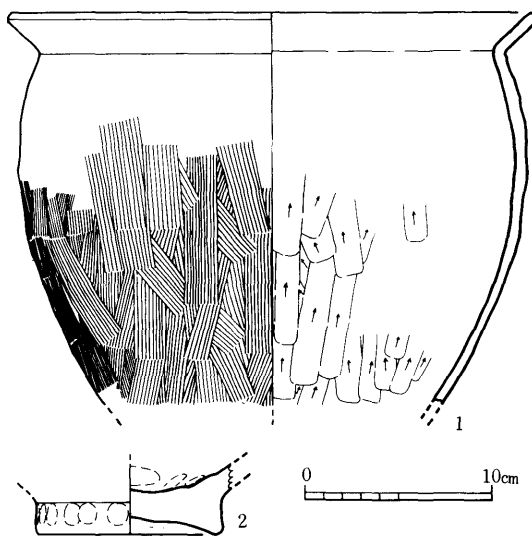


Fig.16 3号土壌出土遺物実測図(1/4)

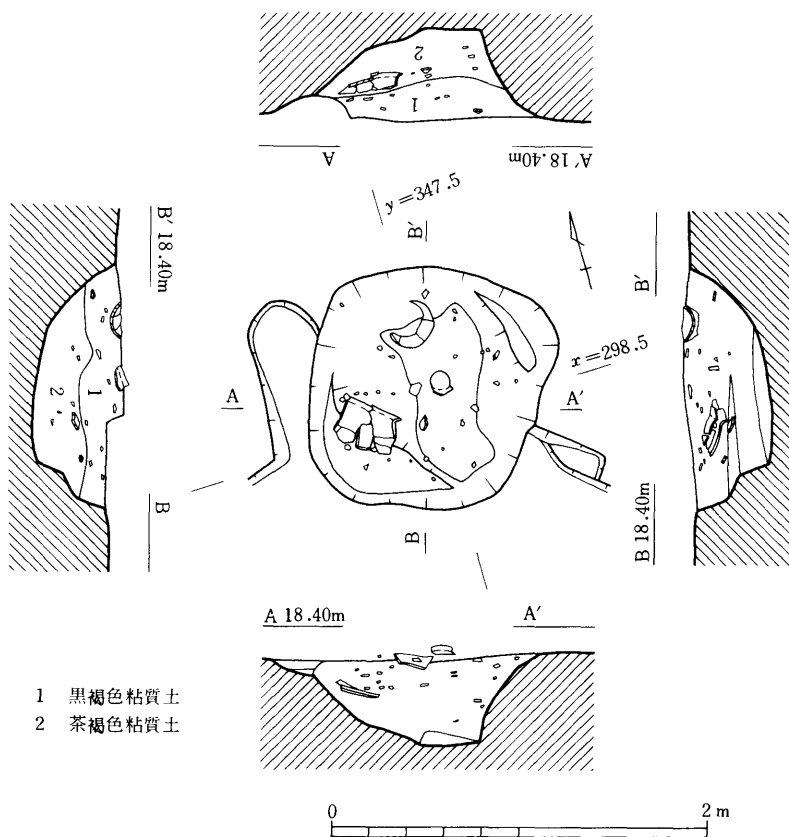


Fig.17 3号土壌実測図(1/40)

みであった。

内部には黒褐色粘質土が充填しており、頸部に断面三角形の貼付突帯を2条付した壺等弥生時代中期の特徴をもつ土器片十数点が出土した。

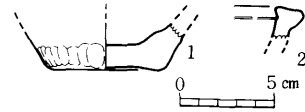


Fig.18 6号土壙出土遺物実測図(1/4)

5号土壙

2号住居跡の北側に位置し溝6に切られている(Fig.19, PL. 14)。平面形態は楕円形に近い円形を呈し、長軸55cm以上、短軸最大長53cm、深さ5cmの規模をもち上面の削平が著しい。

覆土からの出土遺物は皆無であった。

6号土壙

5号土壙の西に近接して営まれており、溝7によって切られている(Fig.19, PL.15)。5号土壙との新旧関係は判然としない。平面形態は不整形な楕円形になるものと思われる、規模は長軸最大長92cm、短軸最大長38cm、深さ平均4cmで、床面は西から東へゆるやかに傾斜している。

覆土からは弥生式土器が数点出土した(Fig.18, PL.38-(3))。1は壺の底部と思われるもので外面に指圧痕がみられる。横ナデおよびナデ仕上げ。胎土、焼成とも良好で外面赤褐色、内面黒色。2は高坏の坏部で口縁端部を肥厚させ内面に篋による沈線様の圧痕が認められる。胎土良好で外面赤褐色、内面暗灰色を呈し焼成は甘い。

中期後半かと思われる。

7号土壙

1号住居跡の南傍に位置し、調査区域の

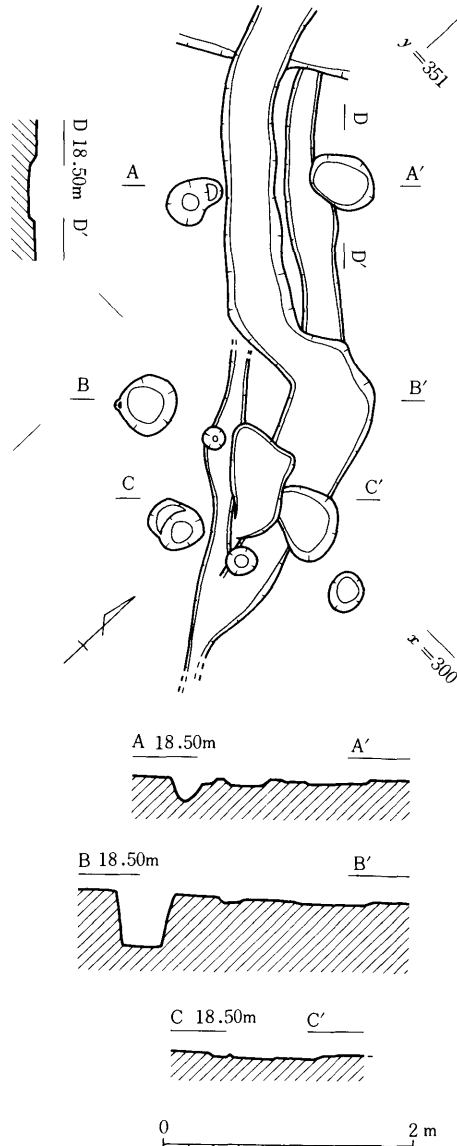


Fig.19 4・5・6号土壙および溝2・6・7・8実測図(1/60)

拡張によって完掘しえた土壌である(Fig.21, PL.16)。平面形態は東西に長い三角形状を呈し、東西最大長370cm、南北軸77cm、深さ22cmの規模をもつ。

茶褐色粘質の覆土から弥生式土器が十数片出土したが、床面付着のものはみあたらなかった。図示可能な遺物は1～4の甕である(Fig.20, PL.39-②)。1・2は「く」の字状に外反する口縁部をもつ甕で、2は口縁端部が肥厚する。いずれも口縁部内外面は横ナデ、他はナデ調整を行なう。1は胎土、焼成とも普通で橙褐色を呈す。口径21.8cm。2は胎土精良、赤褐色で焼成は軟質。口径16.4cm。3・4は底部である。3は胎土、焼成不良で外面赤褐色、内面黒色。4は胎土、焼成とも良好で黄褐色を呈す。両者ともナデ仕上げ。

本土壌の上限は中期かと思われる。

8号土壌

4号住居跡内南隅で検出された土壌で、4号住居跡によって切られている(Fig.10, PL.17)。平面形態は不整楕円形で、東西軸198cm、南北軸122cm、深さ8cmの規模をもつ。

内部から縄文時代晩期の条痕文土器数点が出土した。

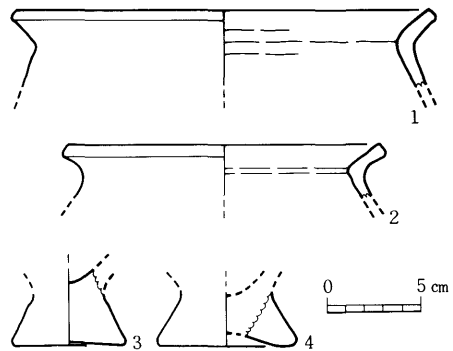


Fig.20 7号土壌出土遺物実測図(1/4)

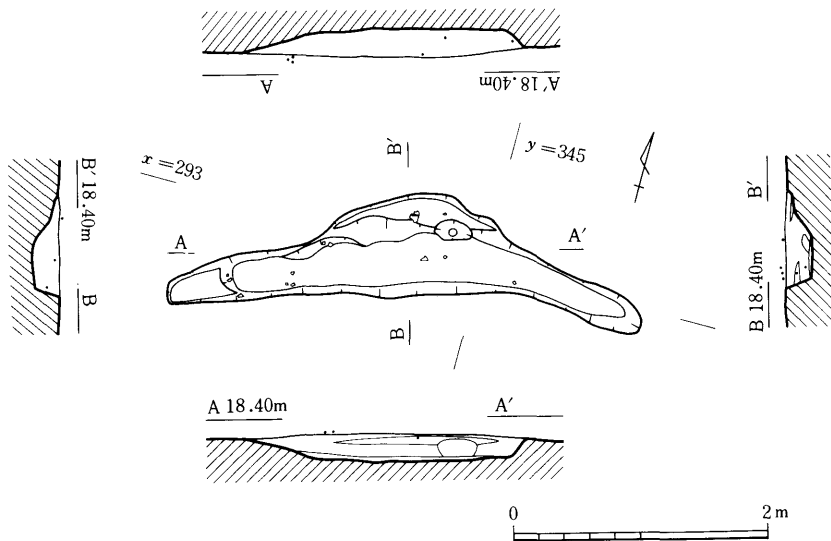


Fig.21 7号土壌実測図(1/60)

(3) 溝

9条検出された。覆土での観察によると少なくとも4時期に大別される(旧→新)。

黒褐色粘質の覆土	溝5・9
	↓
暗茶褐色粘質の覆土	溝6
	↓
明茶褐色粘質の覆土	溝7
	↓
暗灰色砂質の覆土	溝1・2・3・4・8

このうち北東から南西にかけての落ち込みラインと平行して走る溝1は、段落ち下面で検出された8本の杭列との相関関係が認められるようであり最も新しく、近世以後のものと思われる。断面形態は「U」字形に近いもの(溝1・3・9)、「U」字形乃至逆梯形のもの(溝5)、逆梯形に近いもの(溝2・4・6・7・8)がみられる。溝幅は溝5が60~70cm、溝8が20cm、他は30~40cmである。溝深は溝1が14~20cm、溝5が30~55cm、他は3~10cmである。

図示可能な遺物の出土がみられたのは溝5 (Fig.22, PL.19) および溝6である。溝5からは壺・甕・高坏等が出土した(Fig.23, PL.39-(4), 40-(1))。1~3は甕である。1・2は「く」の字状に外反する口縁部をもつ。1は口径に比べ胴部最大径が小さく、口縁端部は平坦である。底部を欠損する。胴部内外面刷毛ののちナデ、口縁部内面刷毛ののち横ナデ、外面横ナデで仕上げている。外面黒褐色、内面橙褐色を呈し、胎土・焼成とも良好。2は球形の胴部外面上半部に篋状工具による刺突文をめぐらしている。頸部内面にわずかに稜を残す。胴部内外面ナデ、口縁部内外面横ナデによる調整。胎土・焼成とも良好で外面赤褐色、内面橙褐色を呈す。3は強く張った胴部にしまりの強い頸部をもつ甕である。口縁部は水平に近く屈曲し、外面中央部は横ナデにより突出する。外面黒褐色、内面黄褐色で胎土、焼成とも良好。口径は1が24.7cm、2が28.8cm、3が15.8cm。4・5は壺。4は短い頸部をもち上下に拡張した口縁端部に3条の篋描き沈線を施すものである。調整は胴部外面篋磨きののちナデ、口縁部内外面

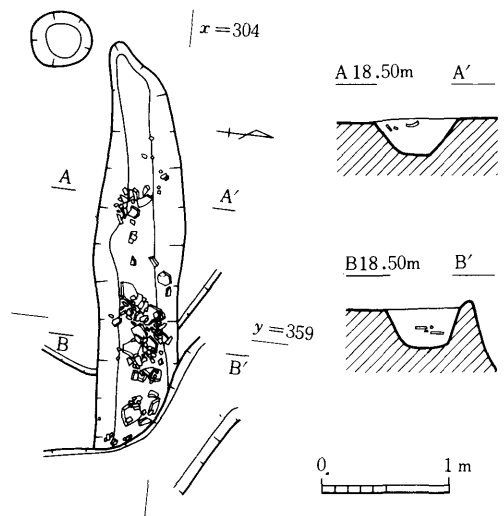


Fig.22 溝5実測図(1/60)

遺構と遺物

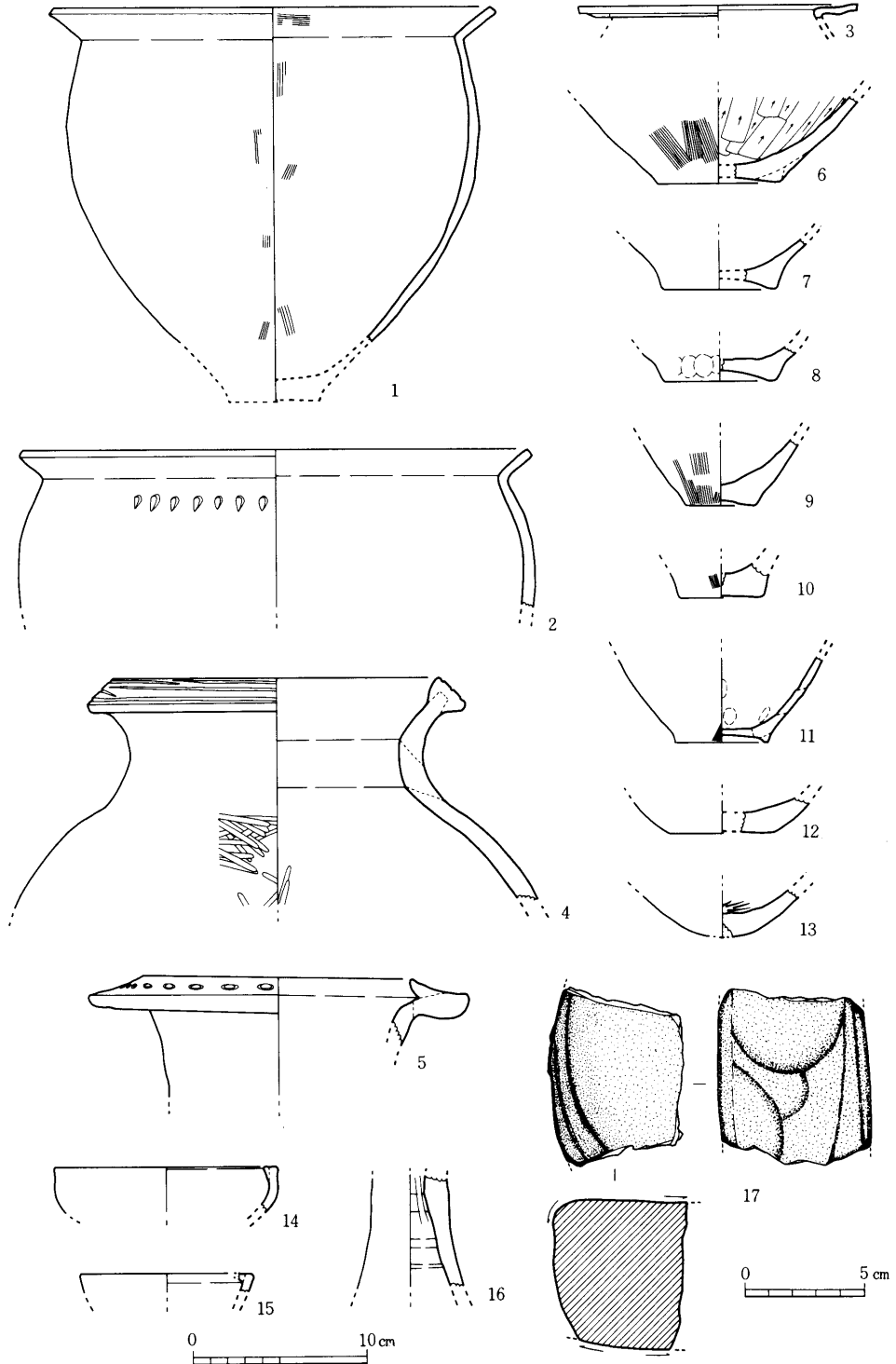


Fig.23 溝5出土遺物実測図（土器1/4・石器1/3）

横ナデ、胴部内面篋磨き。口縁部は沈線施文後横ナデを行なう。外面各所に丹塗りの痕跡がみられ、本来全面に塗布されていたものであろう。胎土、焼成とも良好で淡黄白色を呈す。5はいわゆる複合口縁をもつ壺であろうが、口縁部が未発達であり、また、成形が稚拙で定形化していない。内傾する口縁部外面に竹管文をめぐらしている。頸部外面ナデ仕上げ、他は横ナデによる調整。外面は丹塗りで口縁部の一部に黒斑がみられる。胎土良好、焼成普通で橙褐色を呈す。胎土に黒雲母を含む。口径は4が18.6cm、5が15.0cm。6~13は底部である。上げ底のもの(6~12)と丸底のもの(13)の2種がある。11は外底面に粘土を貼りつけ高台風に仕上げている。調整は不明のものもあるが、外面は刷毛目仕上げのもの(6・9~11)とナデ仕上げのもの(8・13)がみられ、内面は篋削りのもの(6)とナデ仕上げのもの(7・9・11~13)がみられる。13は外面に丹塗りの痕跡が認められる。胎土は11を除いて良好で7は黒雲母を含んでいる。焼成は全資料とも良好で特に13は堅緻である。色調は外面が赤褐色のもの(6・9~12)と橙褐色のもの(7・8・13)とがあり、内面は茶褐色のもの(6・7)、橙褐色のもの(8・9・13)、暗灰色のもの(10)、黒色のもの(11・12)がある。14~16は高坏。口縁端部内面に粘土を貼りつけ肥厚させるもの(14)と拡張させるもの(15)がみられ、いずれも端部は平坦である。両者とも内外面横ナデによる調整で胎土・焼成は良好。14は外面黄白色、内面黒色、15は内外面とも橙褐色。16は脚部の破片で内面にシボリ痕がみられる。調整不明で橙褐色を呈し胎土・焼成とも良好。17は置き砥と思われる砥石である。側面は欠損しているが、表裏両面および側面の一部に砥面がみられ本来は少なくとも3面の砥面を有していたものであろう。粒子は細かく仕上げ砥として使用された可能性が大きい。厚さ7.1cmと厚く重量420g。砂岩製。

本溝は弥生時代中期後半から後期初頭にかけて使用され比較的短期間にその機能を失ったものと思われる。

溝6からは少量であるが遺物が出土している(Fig.24, PL.39-(3))。1は土師器の高坏で磨減剥落著しく調整が観察されたのは坏部内面の刷毛目のみである。胎土精良で濁黄褐色を呈し焼成は良好。脚部内面にシボリ痕がみられる。

2は弥生時代後期のものと思われる底部である。

内外面ともナデ仕上げを行なう。外面橙褐色、内面灰白色を呈し胎土不良で焼成は良好。

(4) 柱穴

柱穴等の竪穴は総数138個検出した(Fig.5,

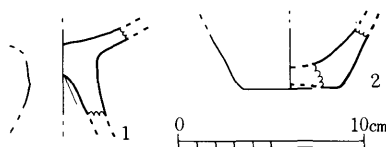


Fig.24 溝6出土遺物実測図(1/4)

PL.3)。覆土はすべて黒褐色の粘質土で、相互の識別は極めて困難であるため柱穴等の竪穴の同一覆土によるグルーピングはできなかった。

調査区北側で検出された柱穴群には住居跡の復原可能な4個の柱穴が認められたが詳細は不明である。また、PH1～3は径50～60cm、深さ55～65cmの規模をもち、他の柱穴とは性格を異にするものかもしれない。

柱穴内から遺物の出土がみられたのはPH4～PH13で、PH4、PH7からは土師器、他の柱穴からは弥生式土器とおぼしき破片が出土した。図化するのはPH6出土の凹石のみで

ある(Fig.25)。長さ9.8cm、幅8.3cm、厚さ5.4cm。機能的には敲石と思われ正背両面にくぼみをもつ。砂岩製。重量680g。

4 小結

本調査区において検出した遺構は住居跡4(5)基、土壇8基、溝9条、柱穴138個である。ここではその調査結果を整理して小結にかえたい。住居跡はいずれも弥生時代の竪穴住居跡で出土遺物はその大半が流れ込みによるものと思われ、かつまた量、質とも良好な資料が得られなかったため詳細な時期比定は困難であるが中期後半から後期初頭(3号住居跡)、後期前半(2号住居跡)の2時期に大別されると考える。また、1号住居跡は後期、4号住居跡は3号住居跡に先行する時期のものと考えられる。調査区北西隅では住居跡の主柱穴を構成していたのではないかと考えられる4個の柱穴が検出されたが、削平により上面を消失しているためその規模、時期等については不明であり、かつまた倉庫的性格も考えられるので断言はできない。平面形態は長方形(3、4号住居跡)、隅丸方形(2号住居跡)、円形(1号住居跡)のものに区分され、少なくとも中期後半から後期初頭の段階で方形系統の住居跡がみられ、円形プランのものが後期の段階にみられる。主柱穴は1号住居跡が周壁に対応して円形にめぐる5本柱、2号住居跡がやや周壁寄りに立てられた4本柱である。3号住居跡は北辺の状態からみて6本の可能性もあるが検出したのは4本である。4号住居跡も同様で検出したのは中央部の1本のみである。

一般的に住居設営にあたっては竪穴内の掘削段階において住居占地地点決定後一定の深

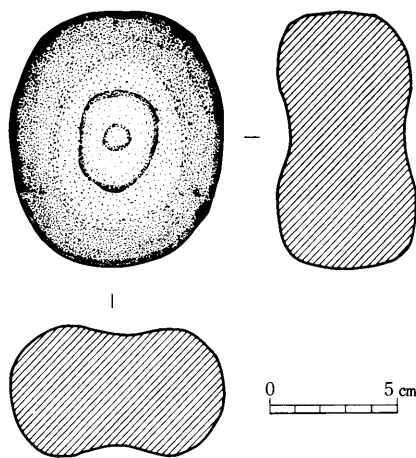


Fig.25 PH6出土遺物実測図(1/3)

PL.3)。覆土はすべて黒褐色の粘質土で、相互の識別は極めて困難であるため柱穴等の竪穴の同一覆土によるグルーピングはできなかった。

調査区北側で検出された柱穴群には住居跡の復原可能な4個の柱穴が認められたが詳細は不明である。また、PH1～3は径50～60cm、深さ55～65cmの規模をもち、他の柱穴とは性格を異にするものかもしれない。

柱穴内から遺物の出土がみられたのはPH4～PH13で、PH4、PH7からは土師器、他の柱穴からは弥生式土器とおぼしき破片が出土した。図化するのはPH6出土の凹石のみで

ある(Fig.25)。長さ9.8cm、幅8.3cm、厚さ5.4cm。機能的には敲石と思われ正背両面にくぼみをもつ。砂岩製。重量680g。

4 小結

本調査区において検出した遺構は住居跡4(5)基、土壇8基、溝9条、柱穴138個である。ここではその調査結果を整理して小結にかえたい。住居跡はいずれも弥生時代の竪穴住居跡で出土遺物はその大半が流れ込みによるものと思われ、かつまた量、質とも良好な資料が得られなかったため詳細な時期比定は困難であるが中期後半から後期初頭(3号住居跡)、後期前半(2号住居跡)の2時期に大別されると考える。また、1号住居跡は後期、4号住居跡は3号住居跡に先行する時期のものと考えられる。調査区北西隅では住居跡の主柱穴を構成していたのではないかと考えられる4個の柱穴が検出されたが、削平により上面を消失しているためその規模、時期等については不明であり、かつまた倉庫的性格も考えられるので断言はできない。平面形態は長方形(3、4号住居跡)、隅丸方形(2号住居跡)、円形(1号住居跡)のものに区分され、少なくとも中期後半から後期初頭の段階で方形系統の住居跡がみられ、円形プランのものが後期の段階にみられる。主柱穴は1号住居跡が周壁に対応して円形にめぐる5本柱、2号住居跡がやや周壁寄りに立てられた4本柱である。3号住居跡は北辺の状態からみて6本の可能性もあるが検出したのは4本である。4号住居跡も同様で検出したのは中央部の1本のみである。

一般的に住居設営にあたっては竪穴内の掘削段階において住居占地地点決定後一定の深

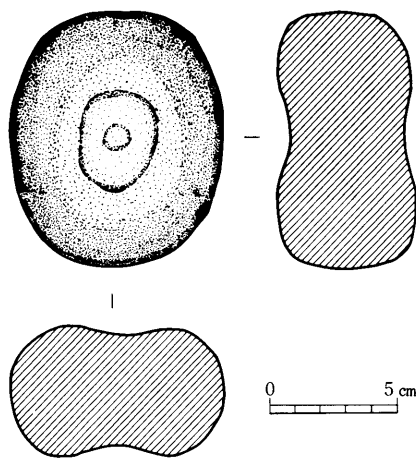


Fig.25 PH6出土遺物実測図(1/3)

Tab. 5 竪穴住居跡一覧表

住居跡番号	平面形態	規模 (m)	深さ (cm)	床面積 (㎡)	主柱穴	炉	壁溝	時期	備考
1号住居跡	円形	径 4.95	6	19.2	5	有	有	後期	張り出し
2号住居跡	隅丸方形	一辺 3.56	15	12.7	4	無	無	後期前半	
3号住居跡	長方形	4.33×3.70	8	16.0	4(6)	無	無	中期後半	
4号住居跡	長方形	4.86×2.72	10	13.2以上	1	無	無	後期初頭	

さに竪穴を掘削し、さらに必要な部位に必要な数、規模の柱穴を穿つのが原則であろう。⁽⁴⁾そこで後期前半の2号住居跡の主柱穴の配列をみてみよう。各周壁に沿う2ヶ所に穿たれた柱穴各々の中心点とそれが対峙する周壁下面点間の距離は東壁とP1、P2の距離が42cm、43cm、以下北壁—P2、P3が各々60cm、54cm、西壁—P3、P4が各々40cm、36cm、南壁—P4、P1が各々39cm、41cmである。また、機能的な作図によって求めた住居跡中心点と各柱穴P1～P4の中心点間の距離はそれぞれ183cm、172cm、172cm、180cmである。本住居跡に限れば、住居跡上面を削平されているため竪穴自身の深さに言及はできないけれども周壁と対峙する各柱穴間の距離は極めて近い値を示している。このことは対角線上に位置する柱穴中心点相互を結ぶラインが住居中心点を通過しないことを考えあわせて、住居掘削の際の偶然の所産なのか、それとも柱穴掘削箇所選定にあたって何らかの基準となるものによって各周壁から一定の距離をおいて柱穴を穿っているか、大いに問題の残るところである。いずれにせよ、作図上の計数処理によるものでおのずと制約があり検討資料の増加を待ちたい。床面積はいずれも20㎡以下で遺跡保存地区で検出された同時期の住居跡よりも小規模である。この問題については第5節に譲ることとする。炉跡、壁溝は1号住居跡のみに認められた。炉跡は、住居床面を皿状に18cm掘りくぼめた楕円形のもので中心部よりやや南に偏在する。壁溝は幅6～20cm、深さはおおむね3cmで部分的に若干の差がある。また、2ヶ所において壁溝のめぐらない部分を確認した。

さらに1号住居跡においては北西部の竪穴周壁から住居跡外へ弧状に張り出した階段状のテラスをもち、階段部分は堅く踏みしまっていた。この部分には壁溝はめぐっておらず柱間に位置する（実際にはP2の方向にややずれている）ため出入口としての機能は十分に果たしうるものと思われる。しかし、旧来東から西へ傾斜していたと思われる旧地表の等高線と平行して張り出ししていることになり、特に除湿性さらには冬場における季節風を

小 結

考慮すると耐寒性等において劣るものと思われる。

このように1号住居跡で見られるような出入口と考えられる周壁の拡張が、平面形態円形の住居跡（方形・長方形の平面形態をもつ住居跡も含めて）に通有のものなのか、あるいは個体差、時期差、さらには地域差を反映しているものなのか出入口としての機能を与える場合問題の残るところである。

また、1号住居跡の南周壁外方に周壁に沿って径16～20cm、深さ15～20cmの垂直に穿たれた4個の柱穴を検出した。これらの柱穴が本来1号住居跡とセット関係にあるのであれば、問題外で榦木を受ける柱の存在も考えねばならないであろう。⁽⁵⁾

土壌は8基検出した。いずれも上面を削平され遺存状態は良好とはいえず、他の遺構との切り合いもあって平面形態をとらえたのは2基のみであった。時期不明のものを除けば縄文時代晩期のもの1基、弥生時代中期後半のもの2基、弥生時代後期のもの1基、弥生時代中期のもの2基である。出土遺物は土器のみで遺物の出土状況を見ると土壌廃棄直後に遺物を投棄したと思われる1・3号土壌以外は、すべて土壌廃絶後の流れ込みによるものであり、その量は少ない。平面形態は円形乃至楕円形で7号土壌はやや特異な形態をもつ。深さは数cmのもの（4、5、6号土壌）、20cm前後のもの（1、2、7号土壌）、40cm前後のもの（3号土壌）がみられる。

弥生時代中期の段階で貯蔵穴として捉えられるものがあることが知られているが、本調査で検出された土壌においては不明と言わざるをえない。また、これらの土壌がいかなる

Tab. 6 土壌一覧表

土壌番号	平面形態	規 模 (cm)		出 土 遺 物	時 期	備 考
		長軸×短軸	深さ			
1号土壌	楕円形	80×(53)	18	弥生式土器(壺・甕)	後期前半	北部削平
2号土壌	不整楕円形	117×80	21～29	弥生式土器		
3号土壌	ほぼ方形	108×104	44	弥生式土器(壺・甕)	中期後半	1号住居跡に切られる
4号土壌	楕円形	55×42	3～7	弥生式土器(壺)	中 期	溝7に切られる
5号土壌	ほぼ円形	(55)×53	5			溝6に切られる
6号土壌	不整楕円形	92×38	4	弥生式土器(壺・高坏)	中期後半	溝6に切られる
7号土壌	三角形	370×77	22	弥生式土器(甕)	中 期	
8号土壌	不整楕円形	198×122	8	縄文式土器	晩 期	4号住居跡に切られる

単位集落、さらには住居跡に帰属するものか調査面積の狭小さのため明確な解答をもたないが、住居跡と同時期に併存したと思われる土壌が存在することは事実であり周辺地域での資料の増加を待って言及することにしたい。

また、1基ではあったが縄文時代晩期の土壌が検出されたことは大きな成果であった。

溝は北西部にくらべて、削平があまり溝底におよんでいない南東部を中心に9条検出された。切り合い関係および覆土から少なくとも4つの時期に区分されるが、時期の判明する溝は少なく溝5が弥生時代中期後半から後期初頭、溝6が弥生時代後期に位置づけられよう。他の溝は溝6より後出のもので、近世に及ぶものもあろうかと思われる。暗灰色砂質土の覆土をもつ溝1・2・3・4・8のうち、溝1と溝4は平行して営まれており、溝1・4と直角方向に存在する溝2・3・8についても同様のことがいえる。溝深は削平により知るすべをもたないが、調査区南東部において溝5が30～55cm残存するのに対し他の溝はすべて3～10cm残すのみである。また、断面形態は溝5を除いて「U」字形あるいは逆梯形を呈し、断面形態による時期差は明確でない。これらの溝のなかにおいて規模、形態等からみて溝5はやや特異といえる。すなわち、セット関係はとらえられないけれども、祭祀的要素の強い丹塗りの土器が投棄された状態で出土しており、溝内祭祀を含めた集落内祭祀の形跡をうかがわせる。

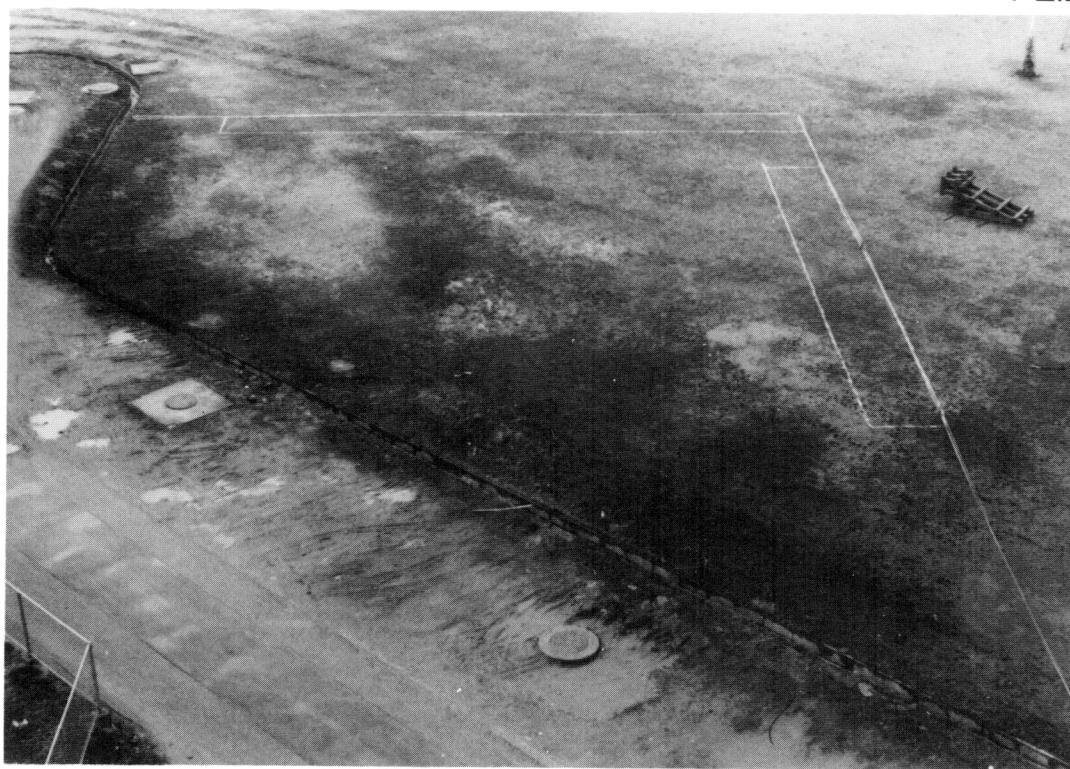
次いで出土遺物についてみると、各遺構における量の多寡はあるものの、その大半が土器でありわずかに紡錘車（2号住居跡）、砥石（溝5）、凹石（PH6）等の石器がみられるにすぎない。そのうち溝5において出土した壺は長い頸部をもちあまり開かない口縁端部内面に小規模ながら断面三角形の粘土帯を貼りつけたものである。これは粘土帯接合により明らかに上方への拡張を意識したもので拡張部分外面に施文帯を造出し、刺突文を施していることからうかがえる。しかし、複合口縁壺として定形化しておらず極めて稚拙な感じをうける。また、同一溝から出土した壺においても口縁端部を肥厚させ凹線様の沈線を施したものが認められ、セット関係は不明であるが両者とも一般的には後期初頭に位置づけられるものであろうか。

以上述べてきたように本調査においては、吉田遺跡南西部に展開する集落形態の一端を垣間見るにすぎないものであり、水田経営を媒介にした農業共同体のあり方について、周辺諸地域における既存資料および今後の調査による資料との有機的な連関をもって検討説明がされねばならない。

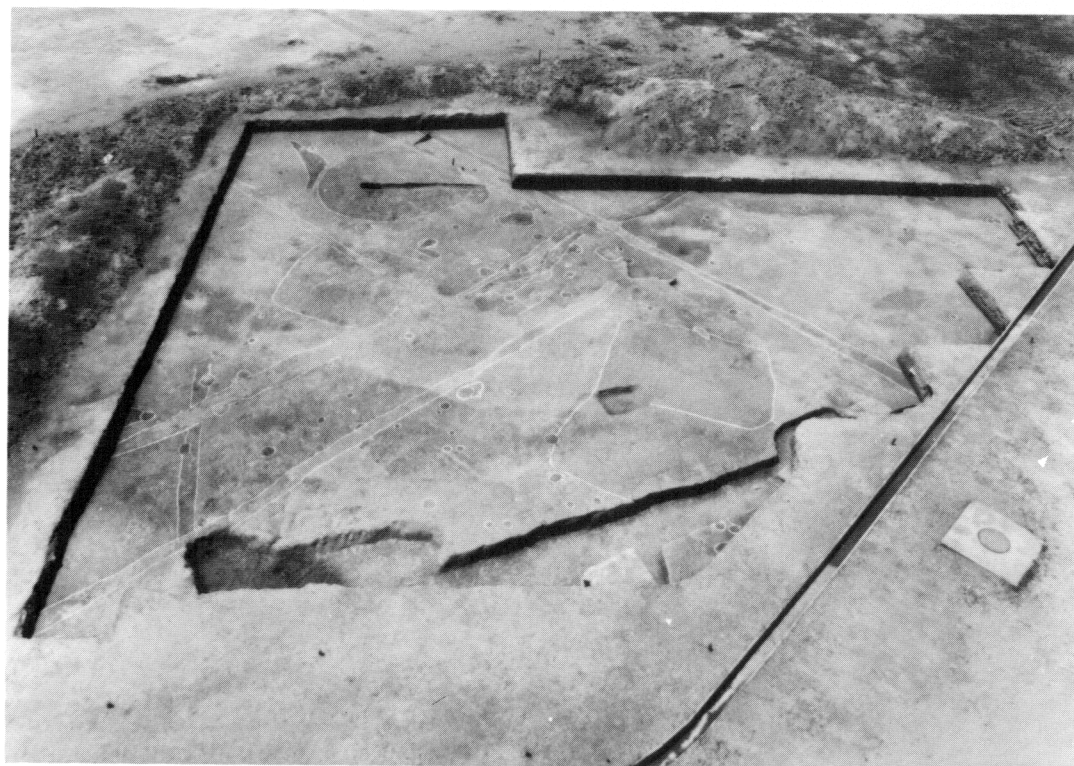
小 結

〔註〕

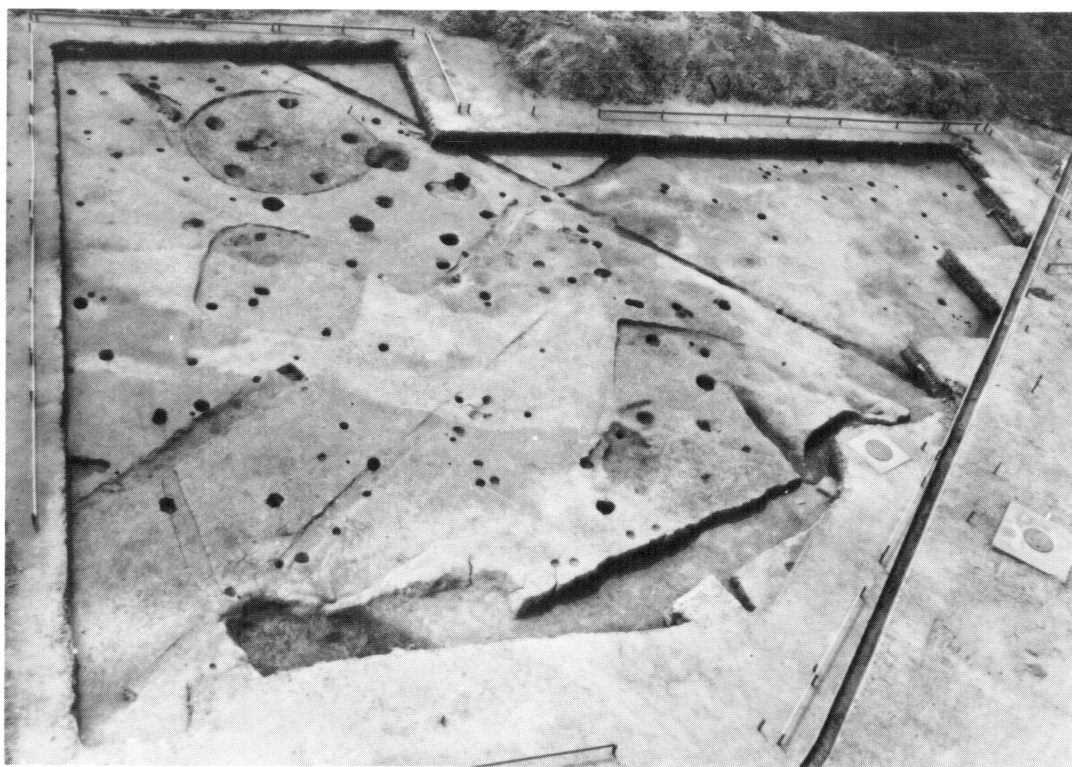
- (1) ここでいう床面積とは周壁に圍繞された部分の面積をさす。以下同じ。
- (2) 機械的に求心した住居跡の中心点と柱穴の中心点間の距離をさす。以下同じ。
- (3) 機械的に求心した住居跡の中心点の柱穴の中心点を結ぶラインの延長上に位置する周壁下面点と柱穴中心点間の距離をさす。以下同じ。
- (4) ここでは炉は除外する。
- (5) 近年では辻田西遺跡の6号住居跡で竪穴外東部における5個の柱穴を住居跡とセット関係にあるものとし、「榎木先が直接この穴にはいるとは考えられず、いわゆる榎木先を受けて固定する垂直の柱が立つものと考えざるを得ない」としている。
北九州市教育文化事業団 「辻田西遺跡」 1982



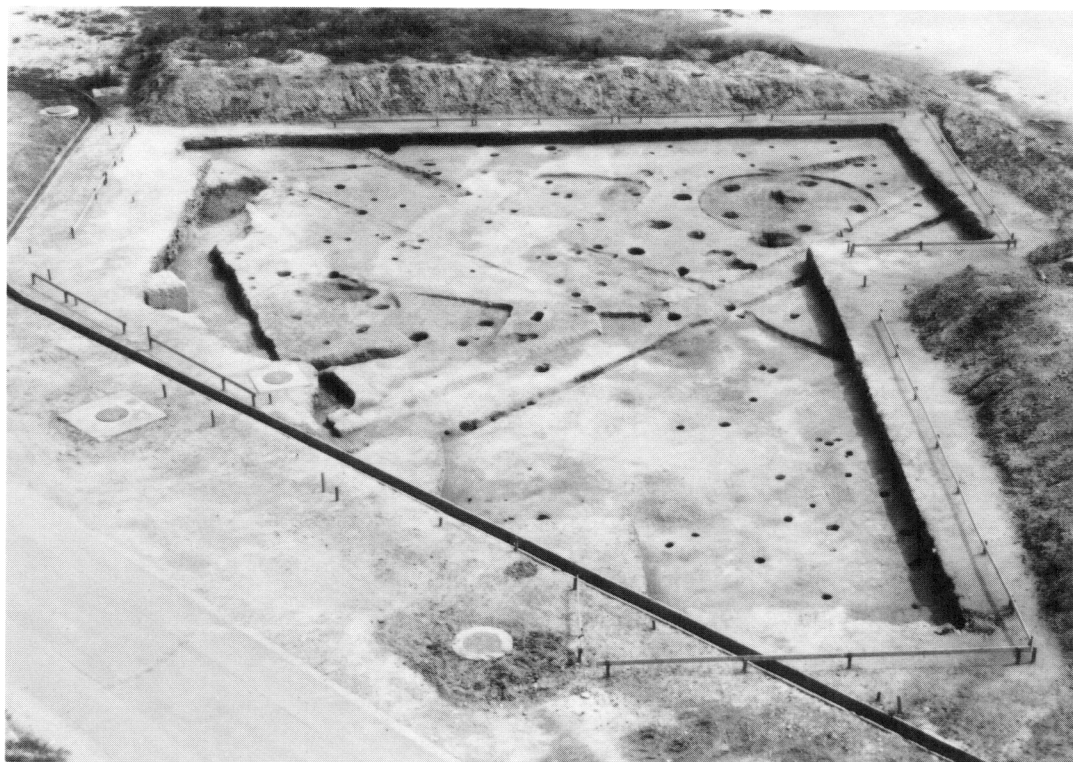
(1) 調査前全景（北から）



(2) 調査区遺構検出状況（東から）



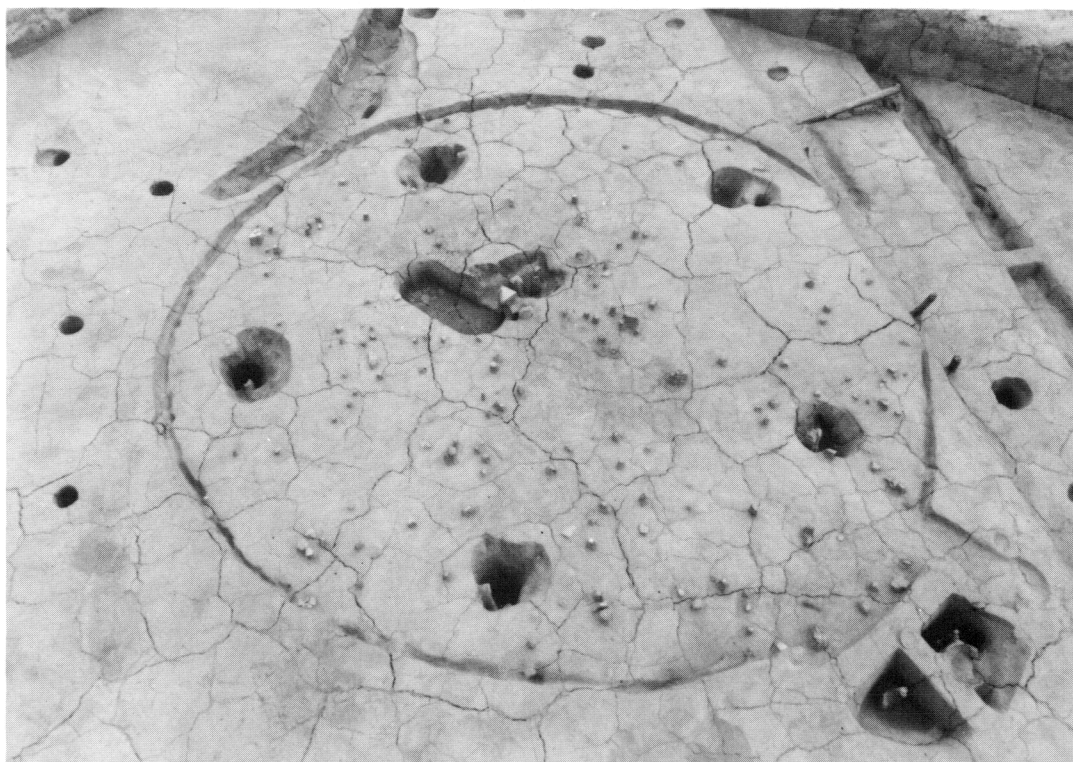
(1) 調査区全景（東から）



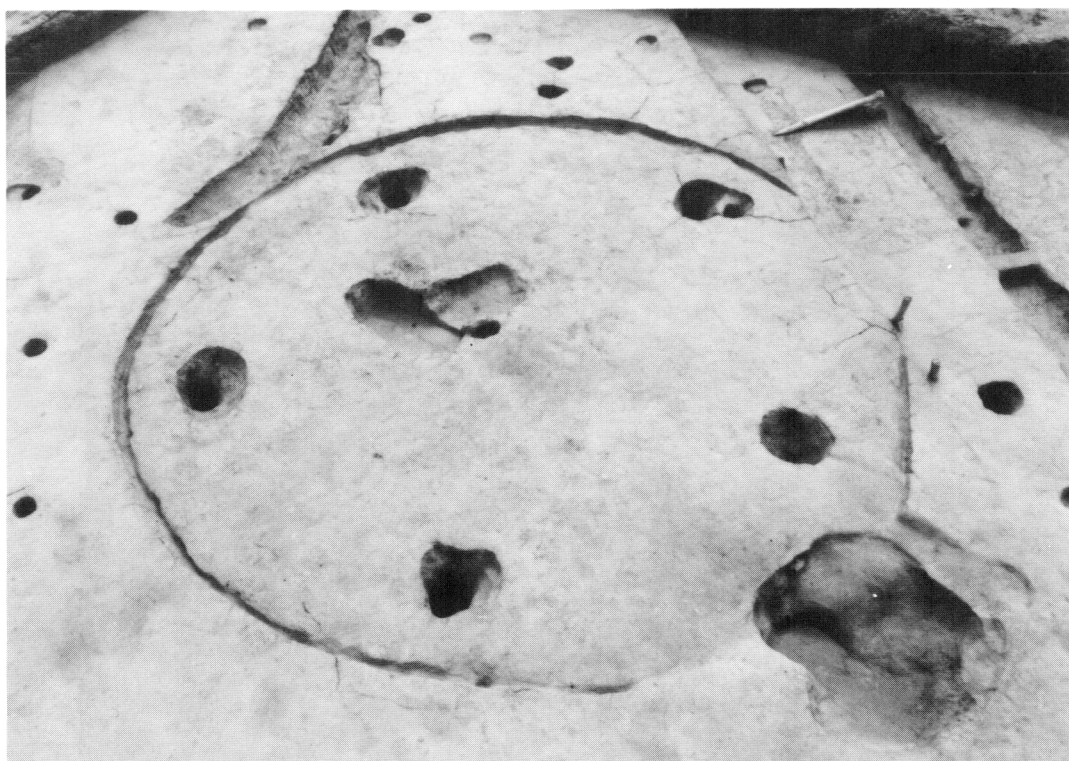
(2) 調査区全景（北から）



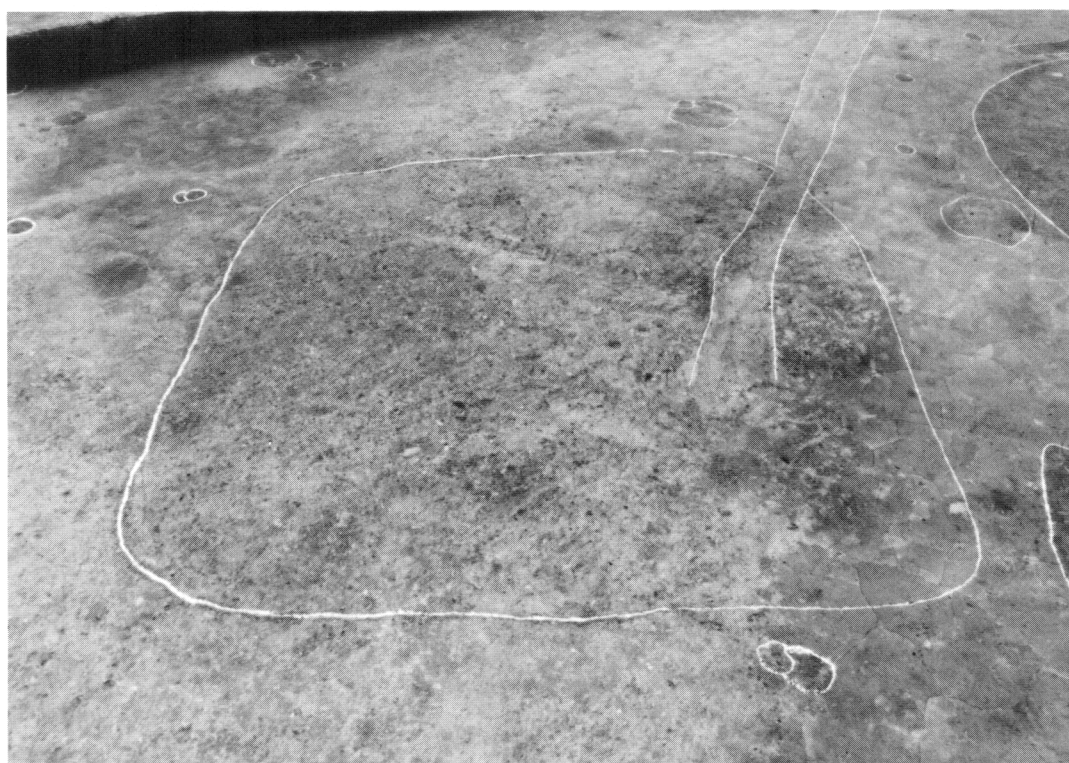
(1) 1号住居跡検出状況（東から）



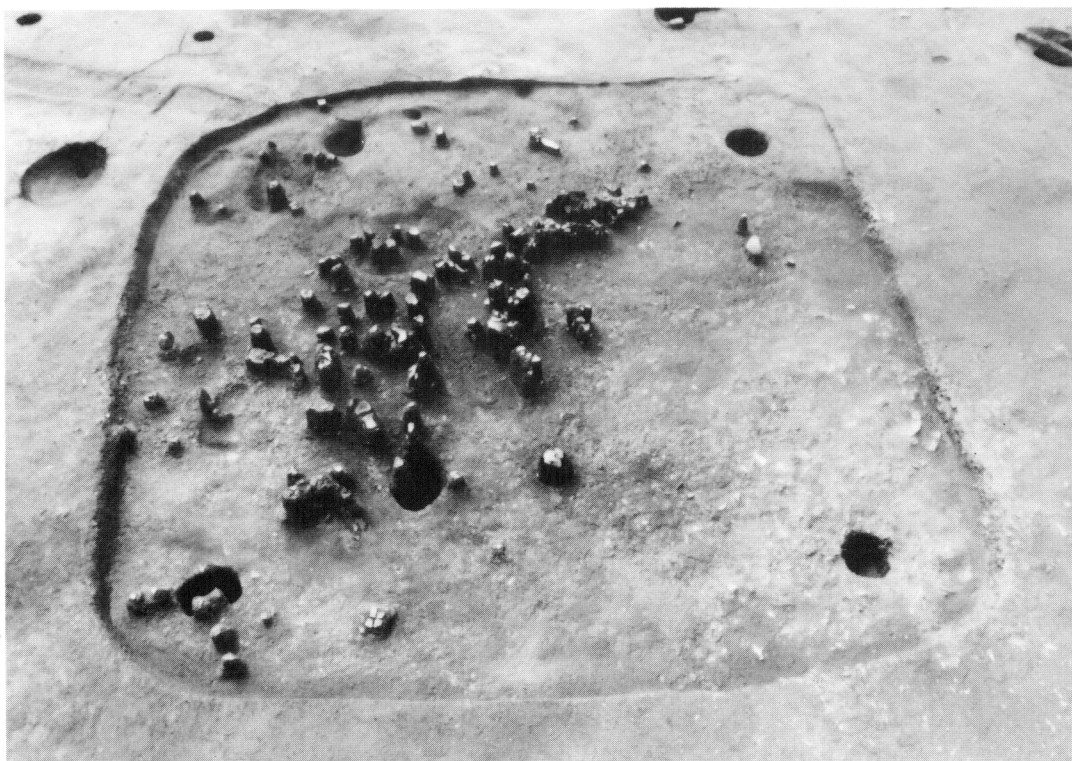
(2) 1号住居跡遺物出土状況（東から）



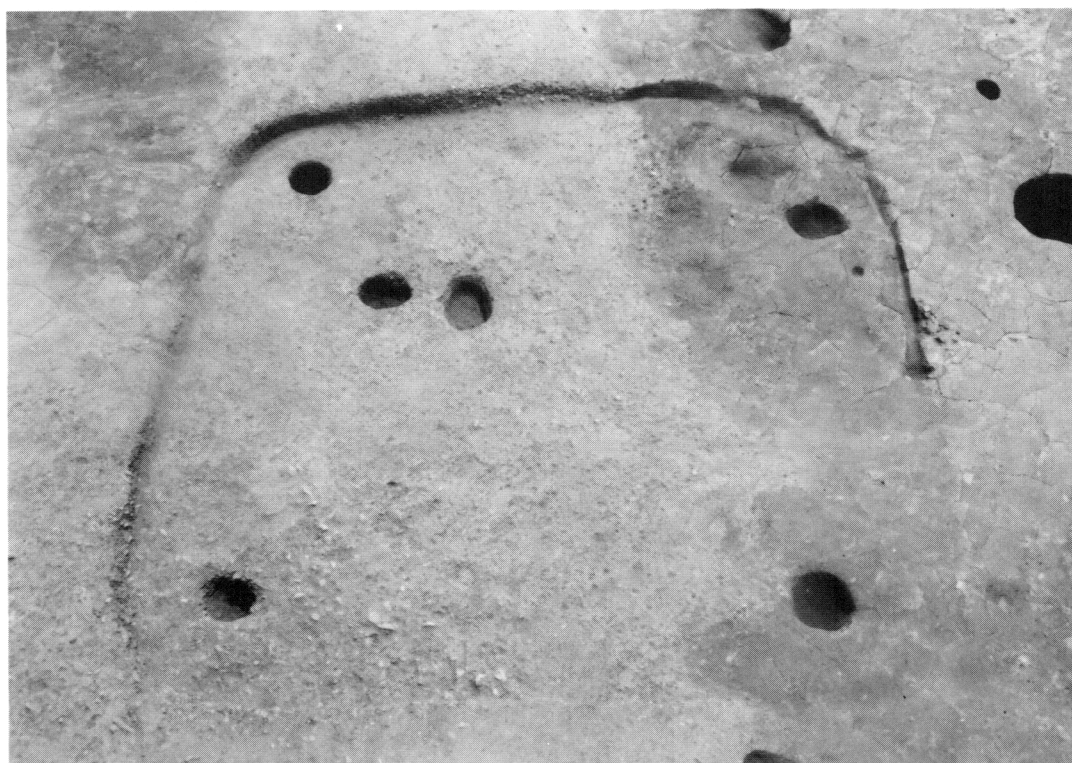
(1) 1号住居跡（東から）



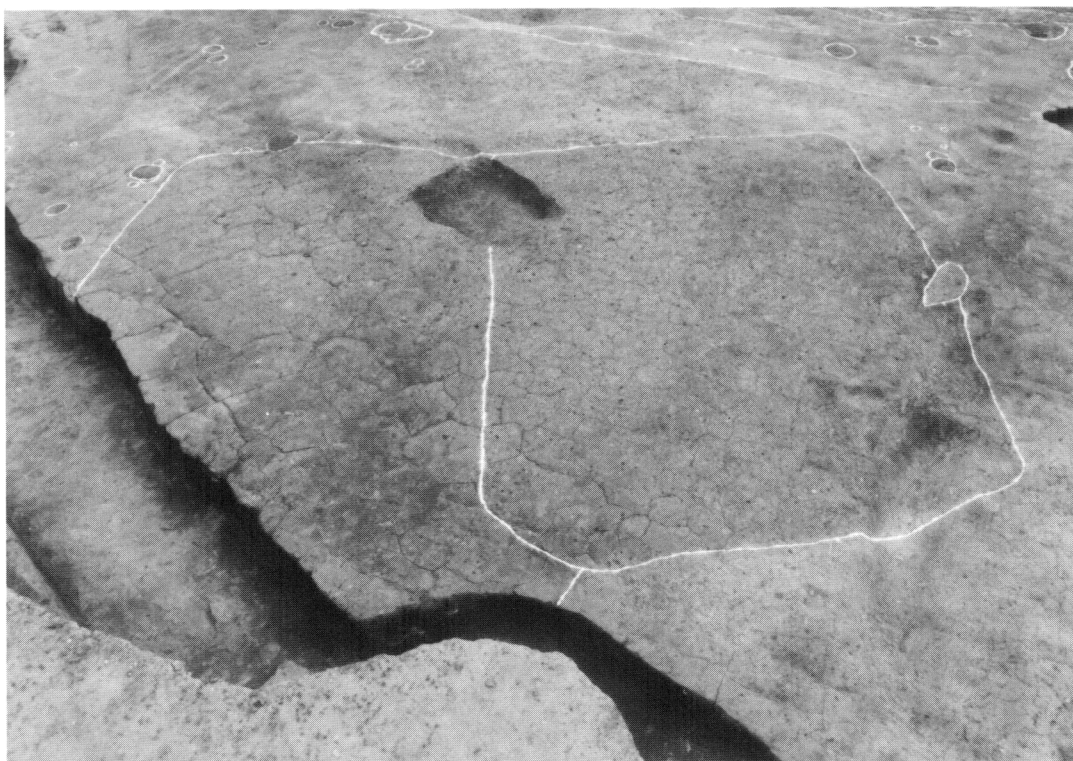
(2) 2号住居跡検出状況（北東から）



(1) 2号住居跡遺物出土状況(東から)



(2) 2号住居跡(北から)



(1) 3・4号住居跡検出状況（北から）



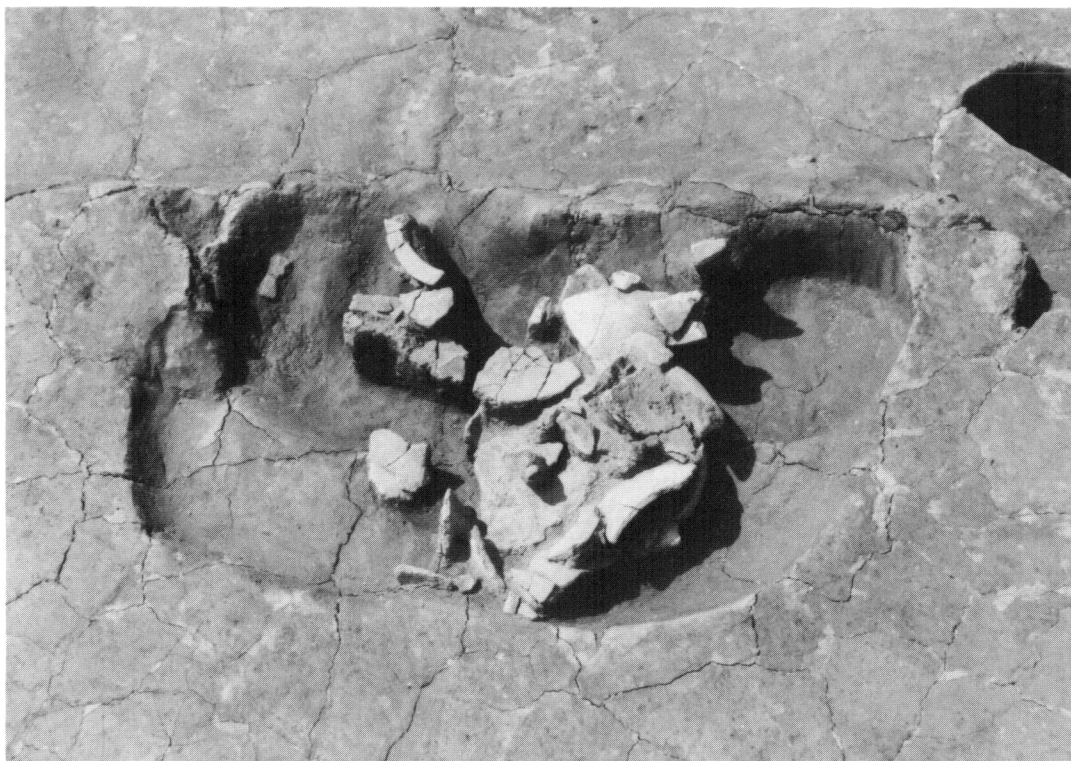
(2) 3・4号住居跡遺物出土状況（南から）



(1) 3・4号住居跡（南から）



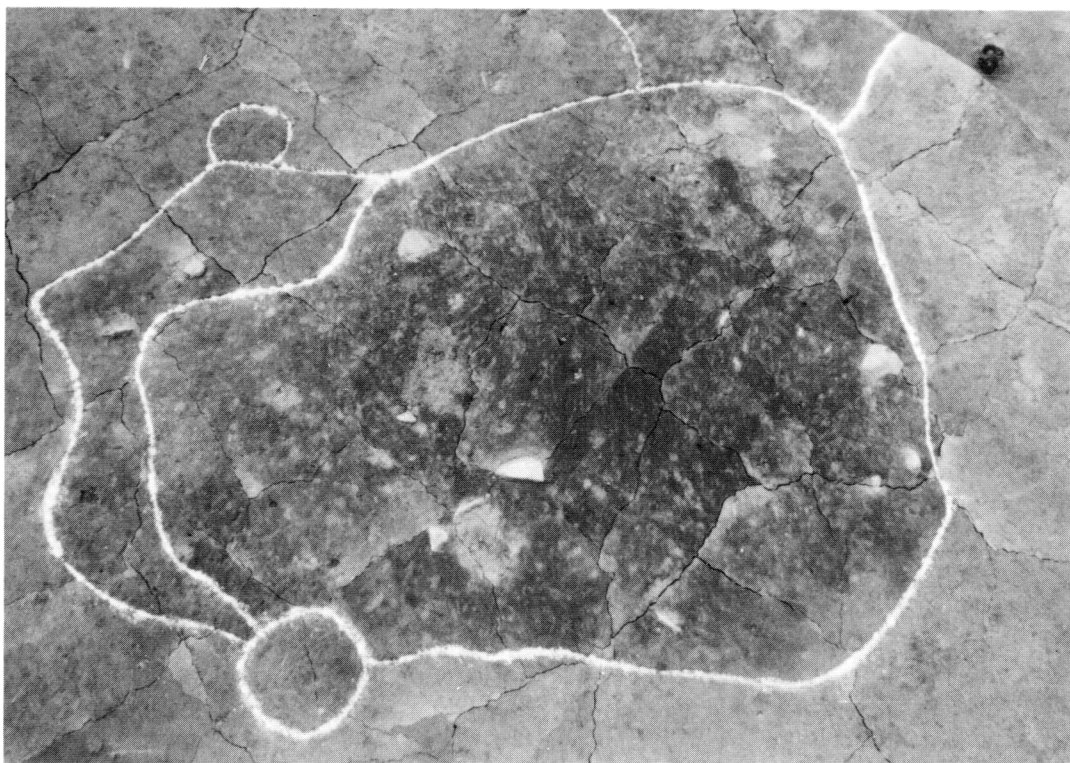
(2) 1号土壌検出状況（南から）



(1) 1号土壙遺物出土状況（南から）



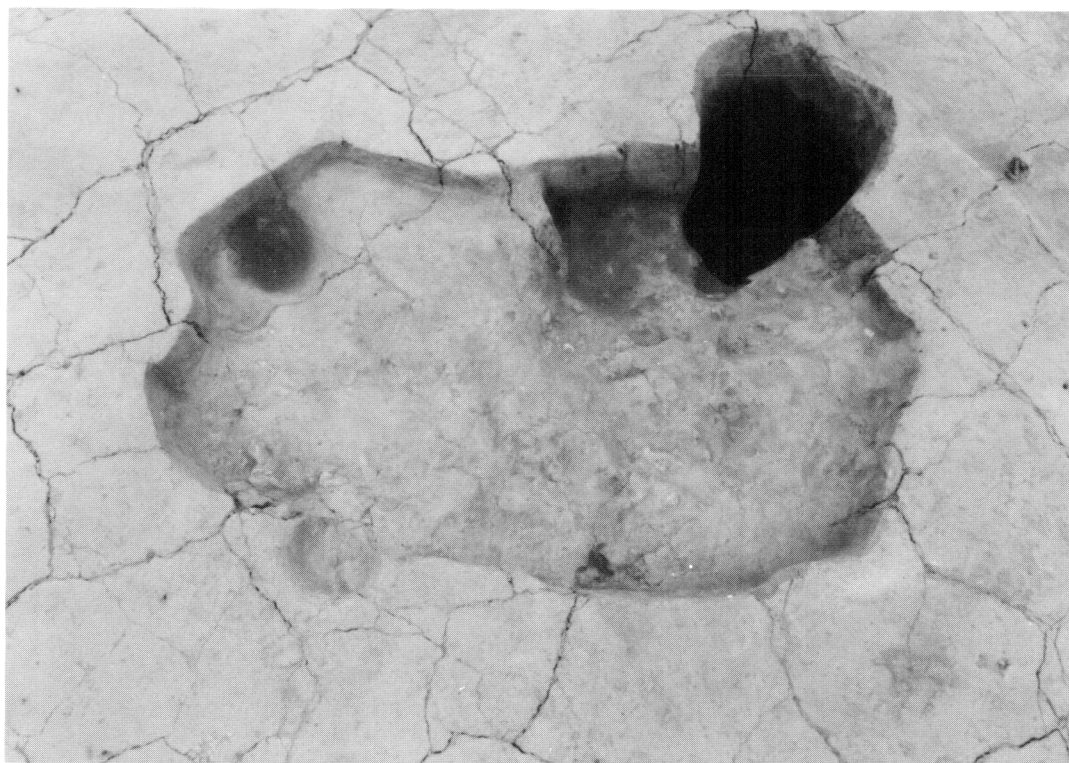
(2) 1号土壙（南から）



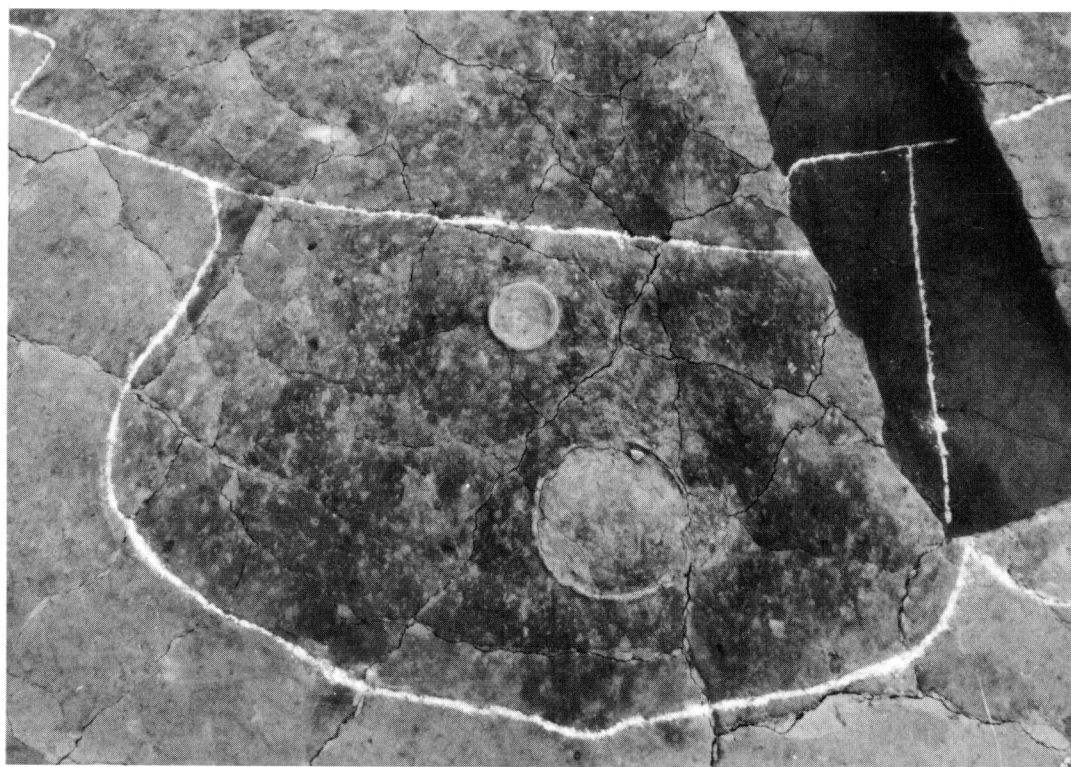
(1) 2号土壌検出状況（東から）



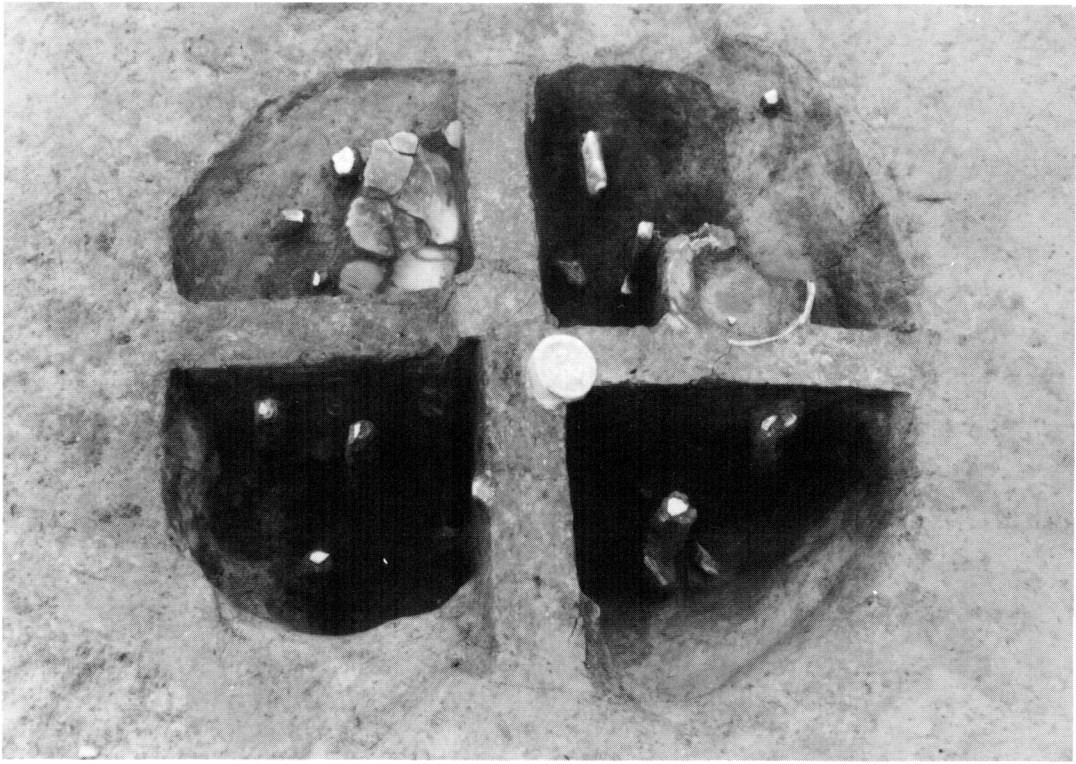
(2) 2号土壌遺物出土状況（東から）



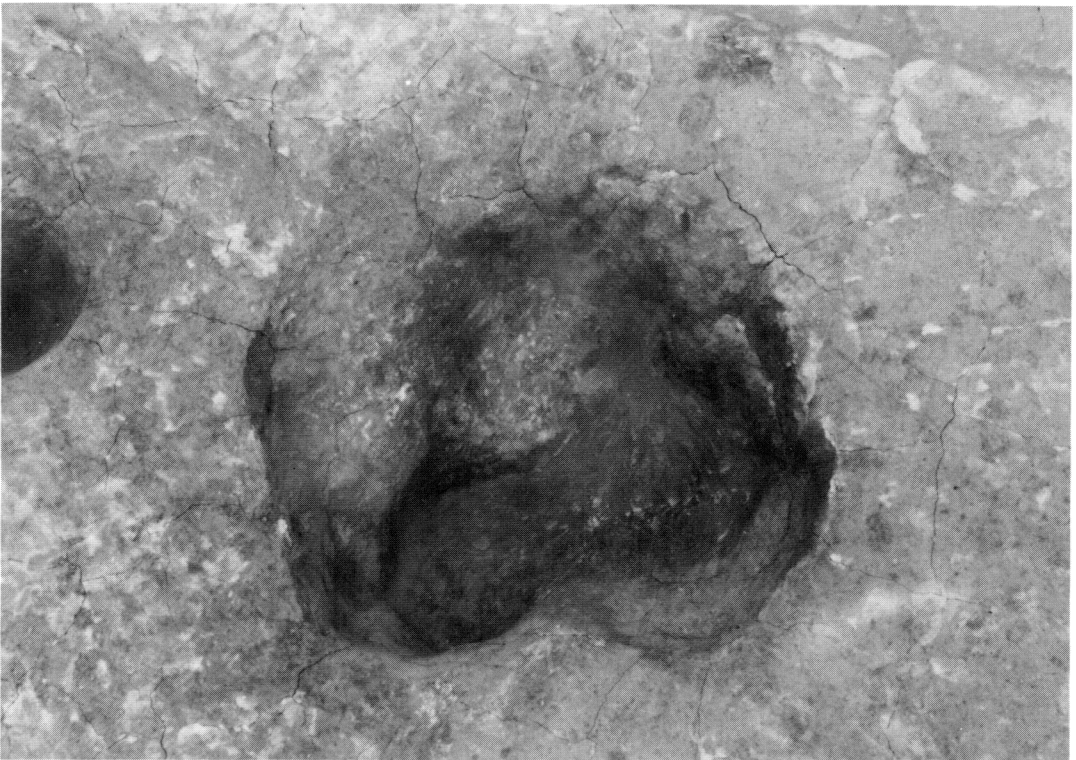
(1) 2号土壌 (東から)



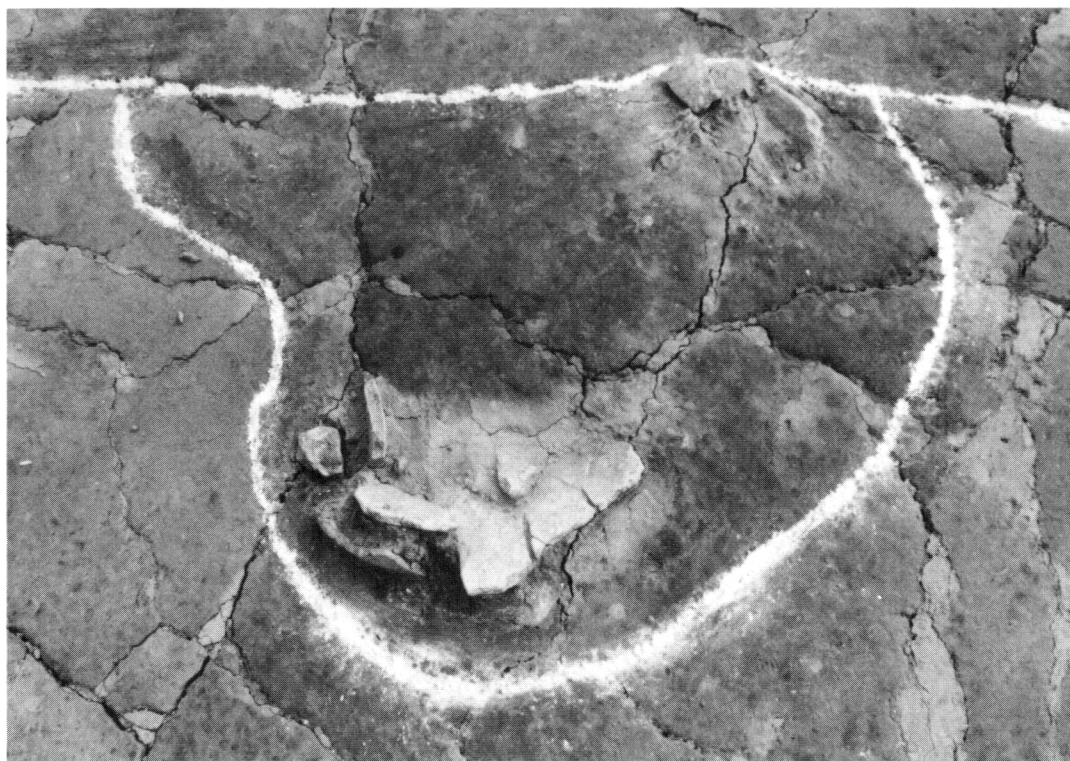
(2) 3号土壌検出状況 (北東から)



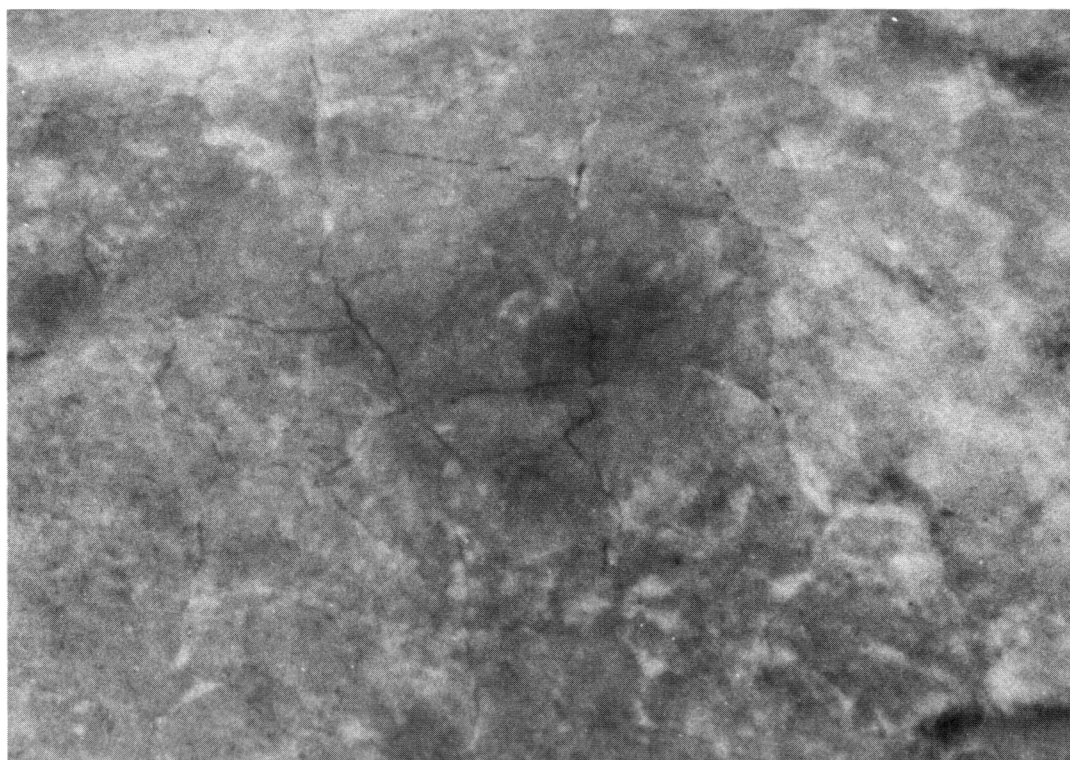
(1) 3号土壇遺物出土状況(東から)



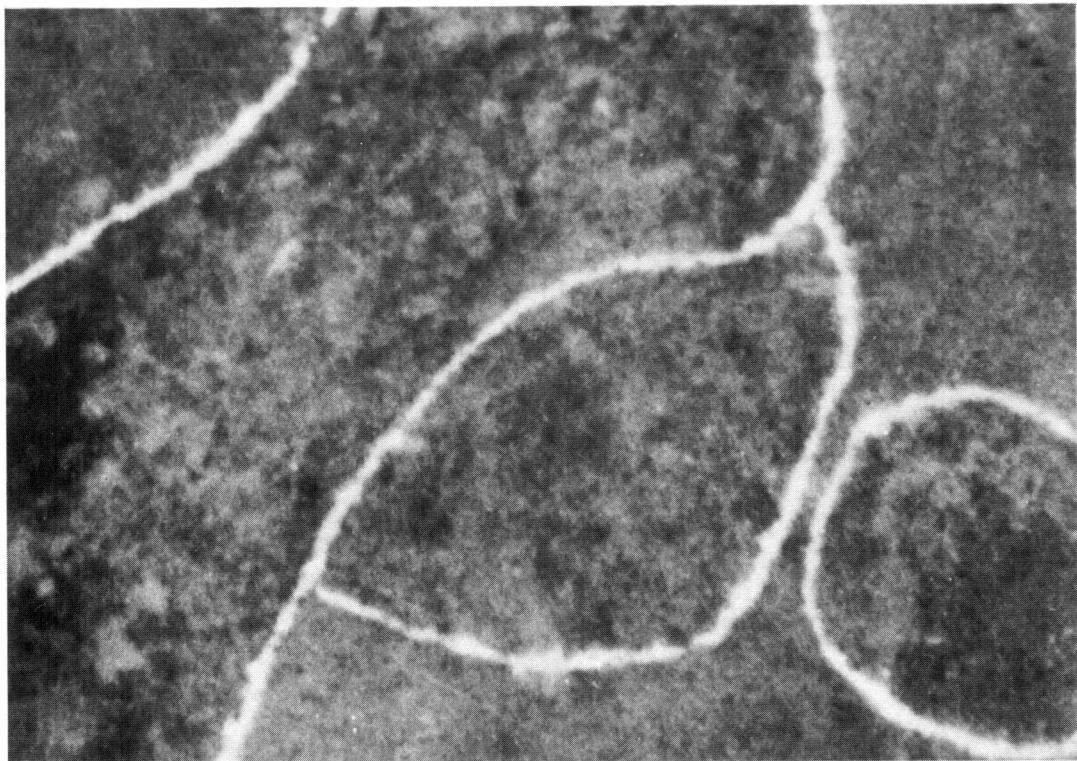
(2) 3号土壇(南から)



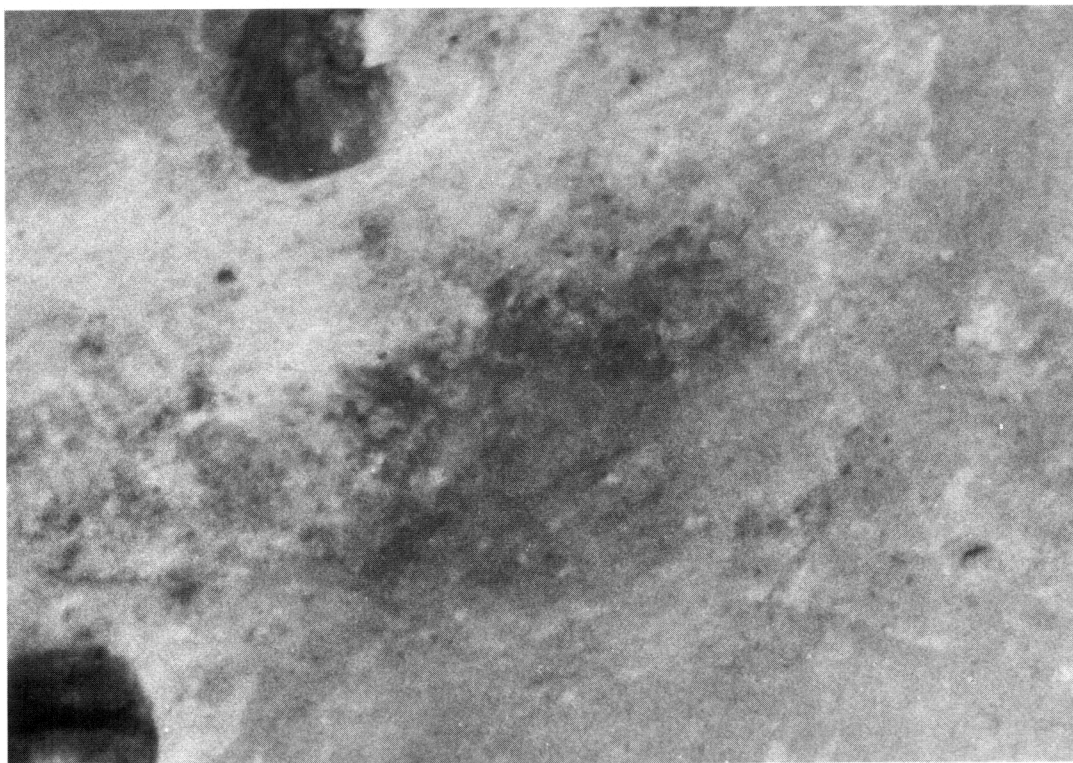
(1) 4号土壌検出状況（北東から）



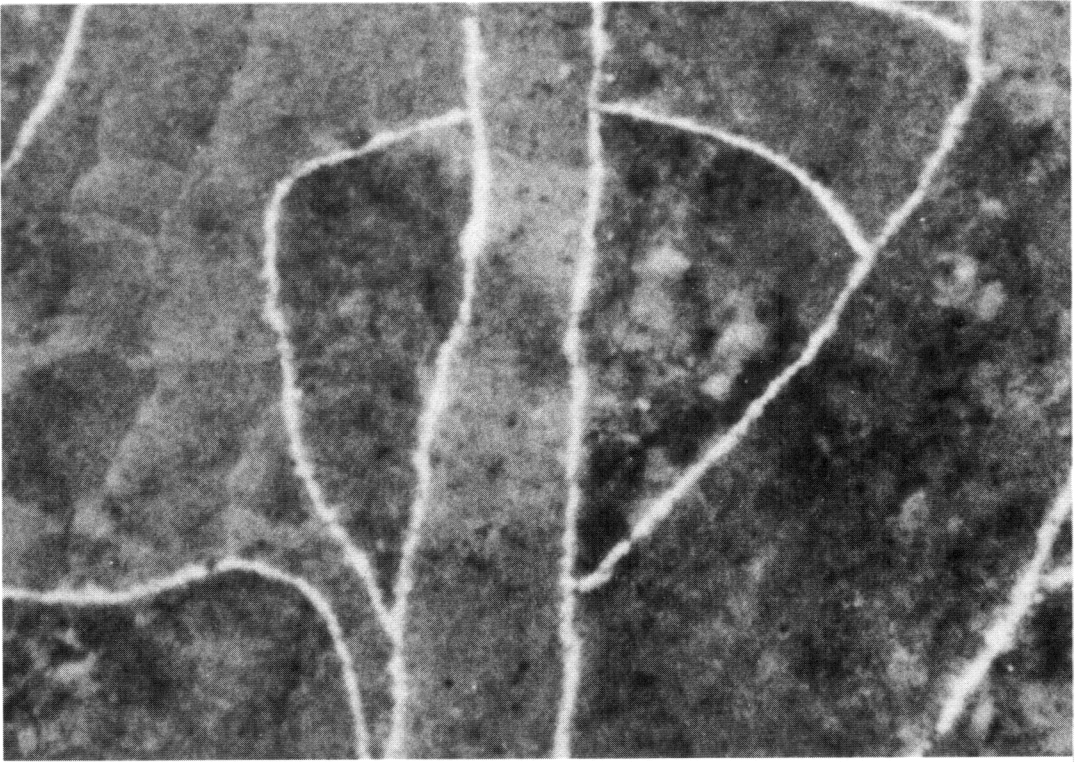
(2) 4号土壌（北東から）



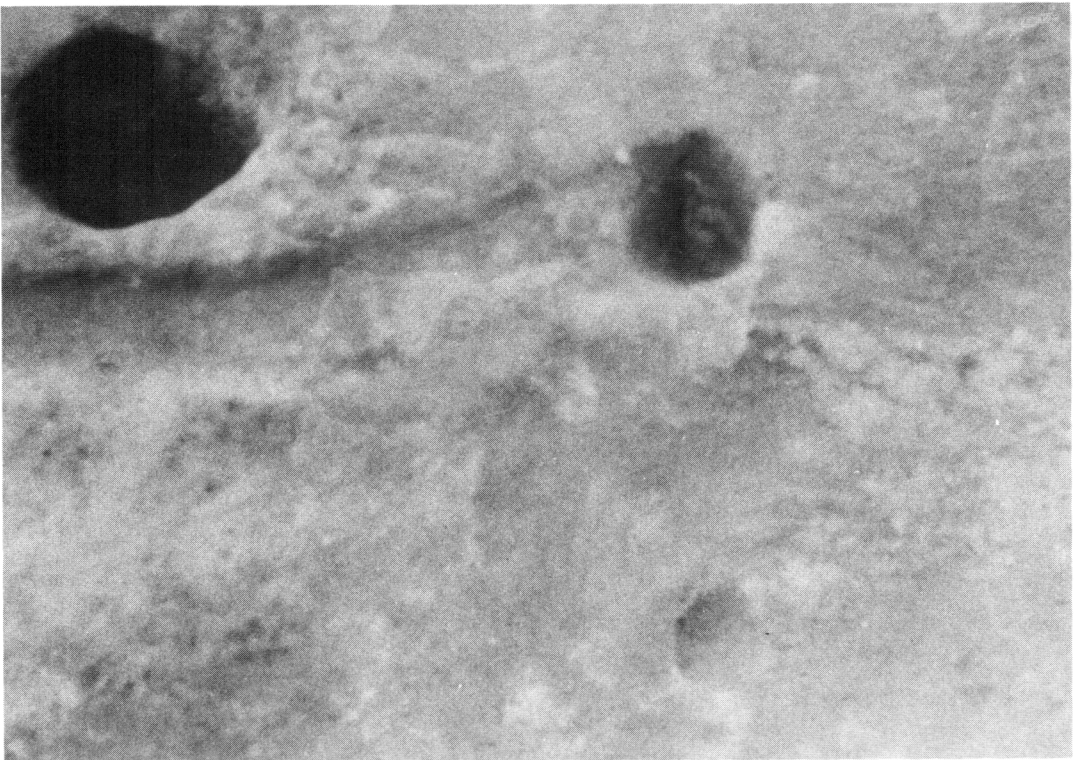
(1) 5号土壌検出状況（南東から）



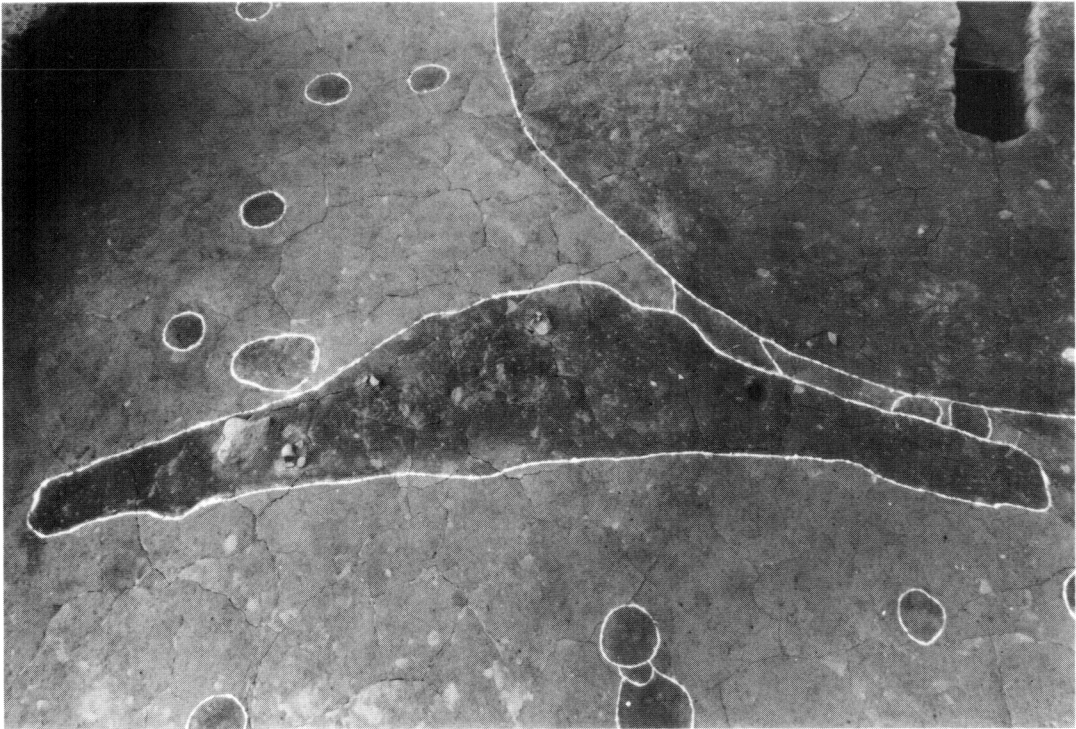
(2) 5号土壌（北東から）



(1) 6号土壌検出状況（南東から）



(2) 6号土壌（北東から）



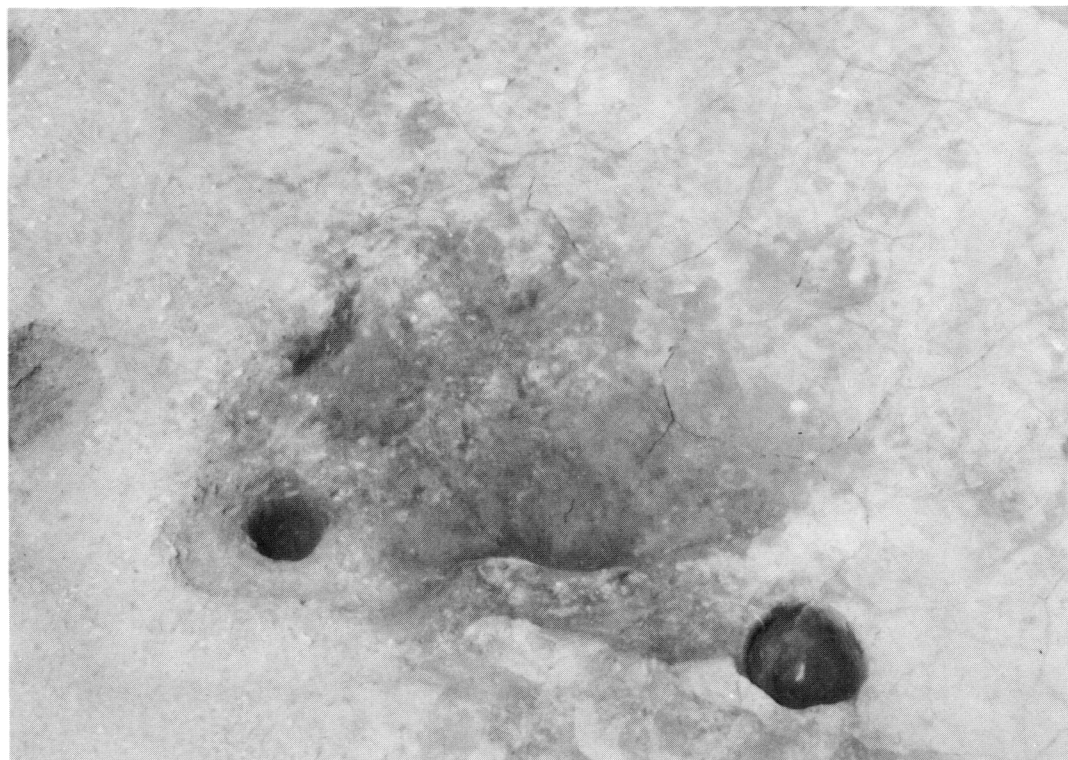
(1) 7号土壤検出状況（南から）



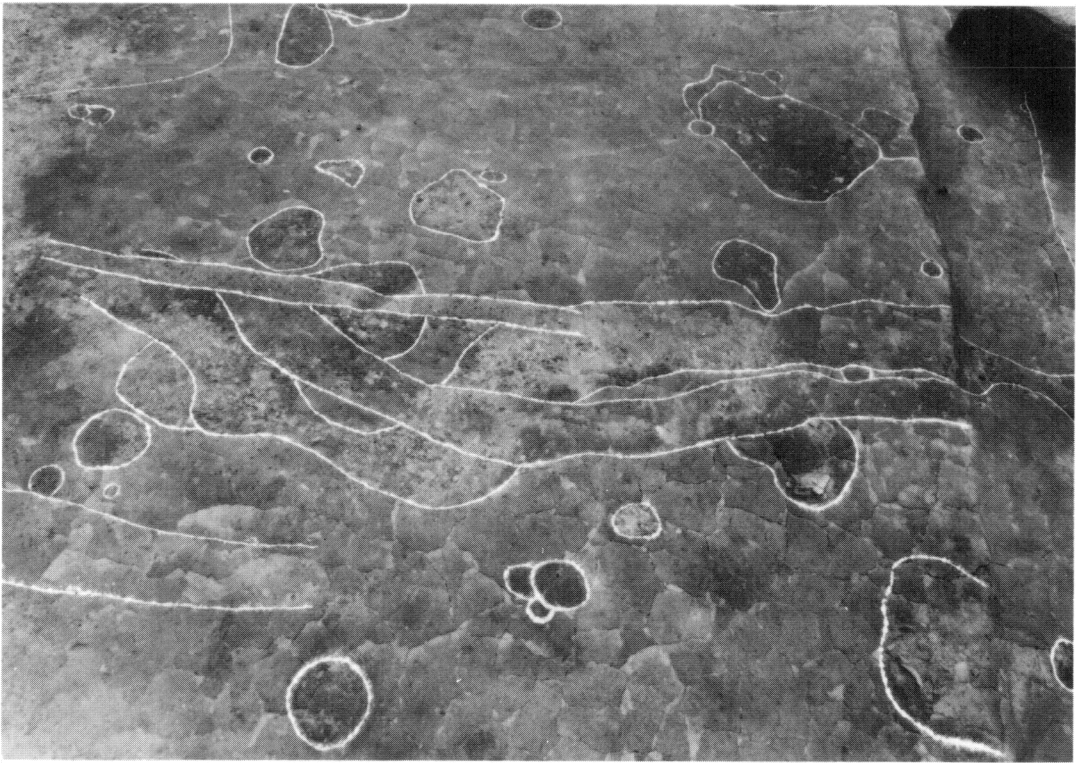
(2) 7号土壤（北から）



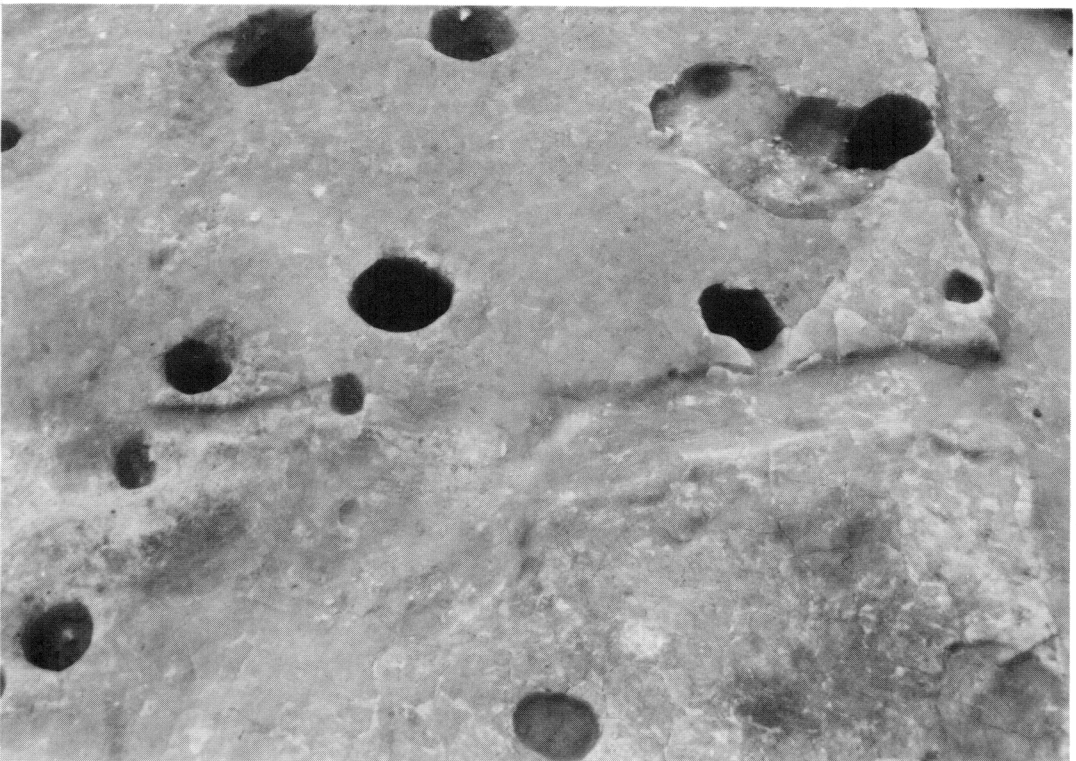
(1) 8号土壙遺物出土状況（南から）



(2) 8号土壙（南から）



(1) 溝2・6・7・8検出状況(北東から)



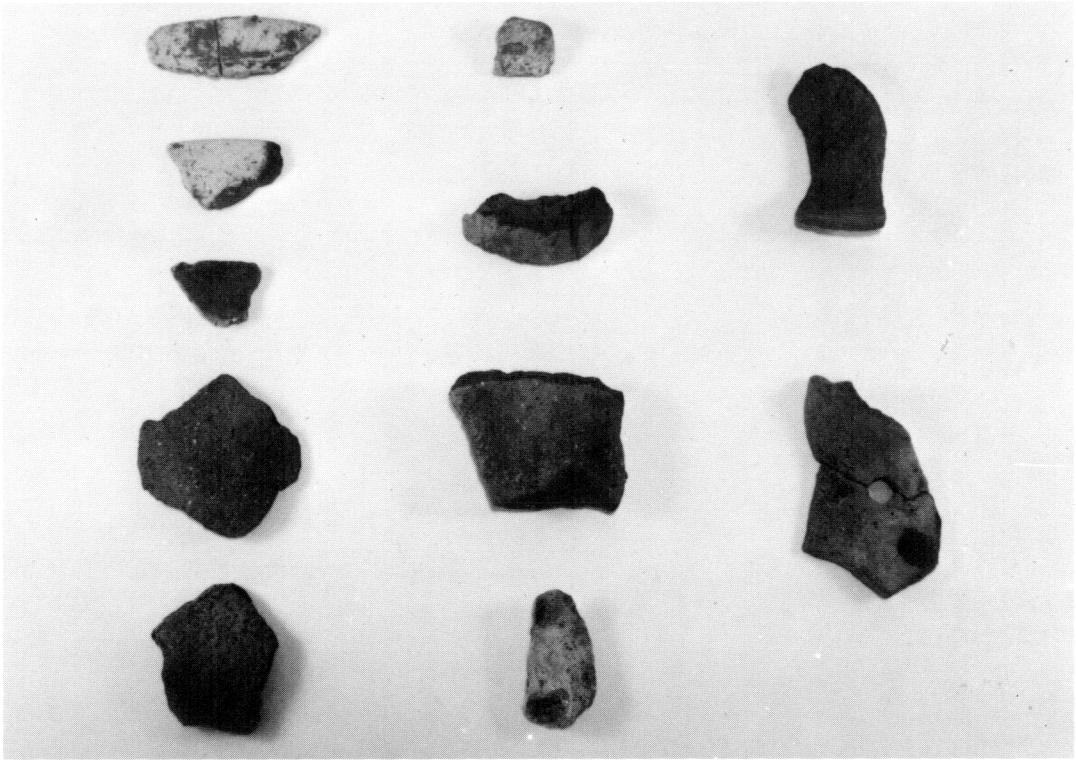
(2) 溝2・6・7・8(北東から)



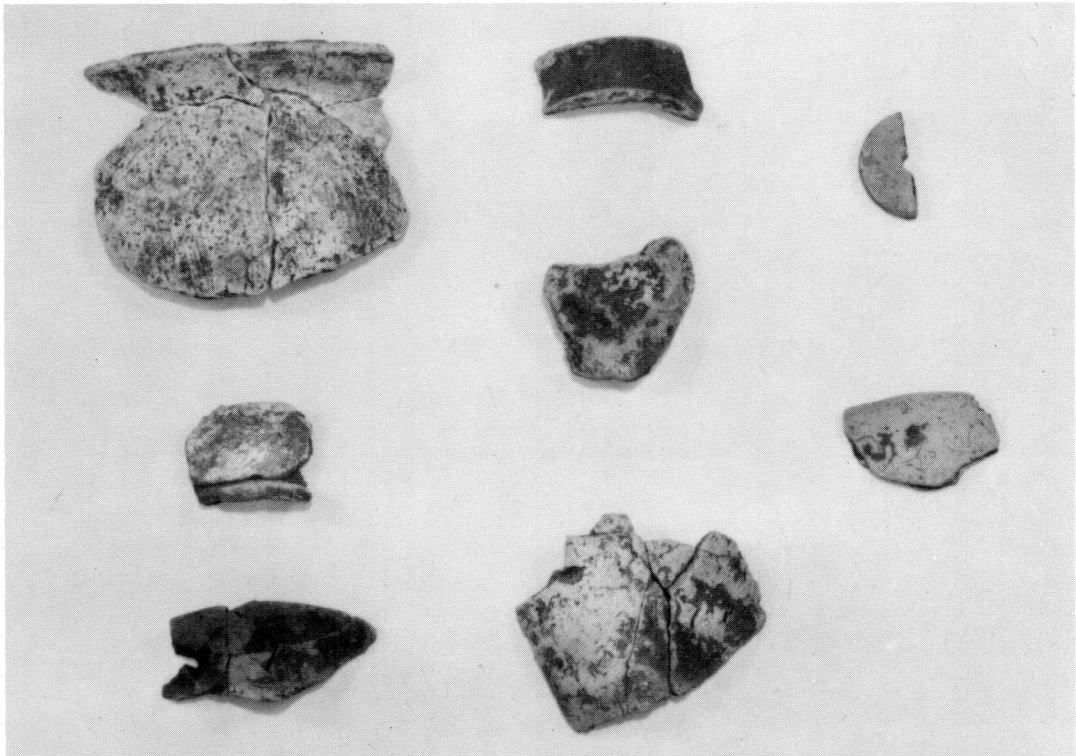
(1) 溝5 遺物出土状況 (北西から)



(2) 溝5 (南から)



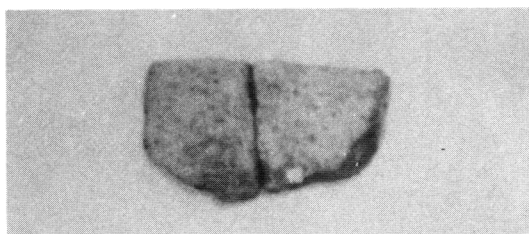
(1) H-19区1号住居跡出土遺物



(2) H-19区2号住居跡出土遺物



(1) H-19区3号住居跡出土遺物



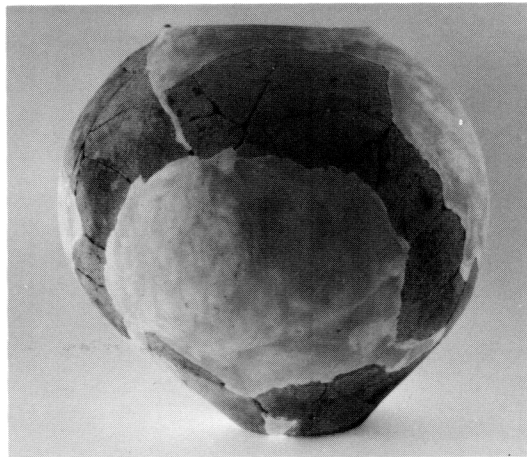
(2) H-19区4号住居跡出土遺物



(3) H-19区6号土壙出土遺物

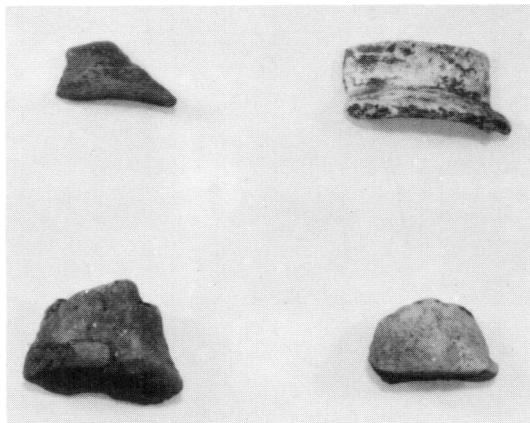


(4) H-19区1号土壙出土遺物

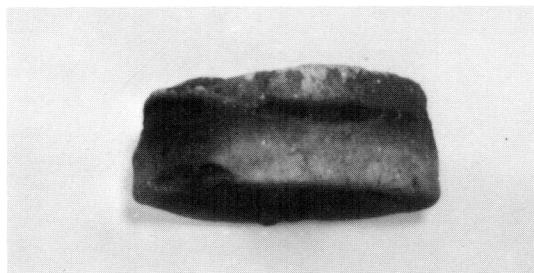




(1) H-19区3号土壙出土遺物



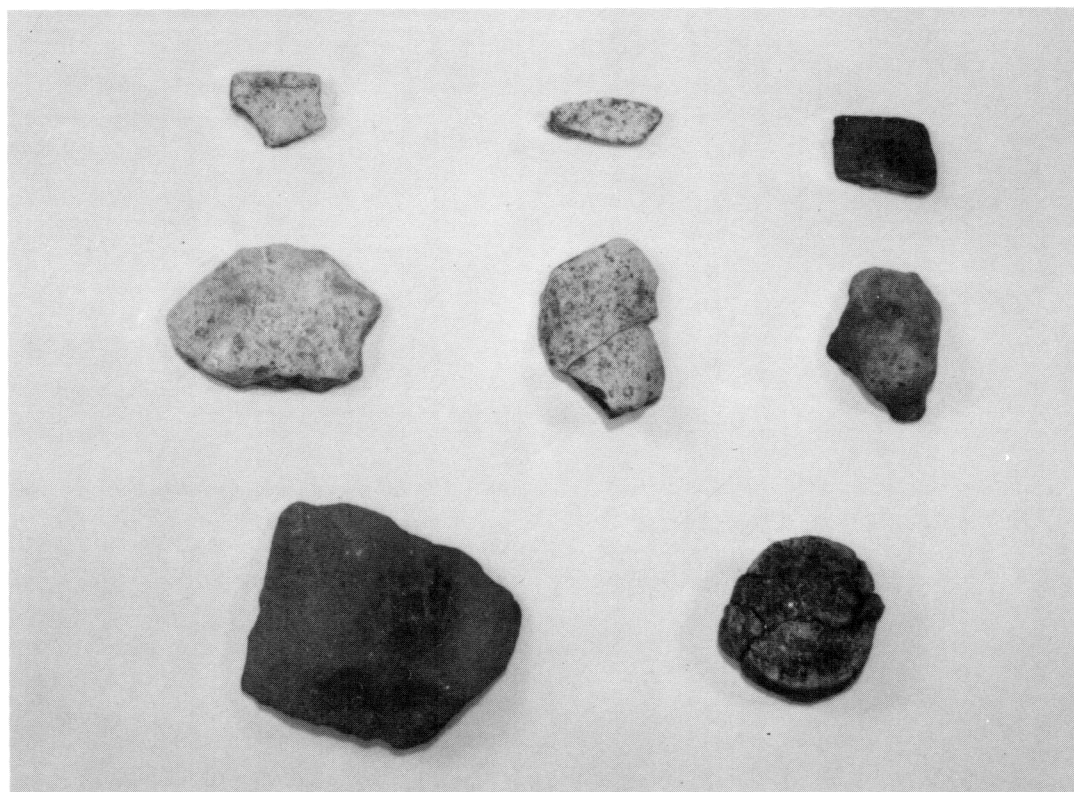
(2) H-19区7号土壙出土遺物



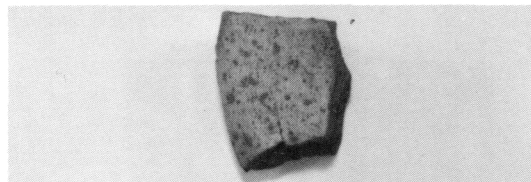
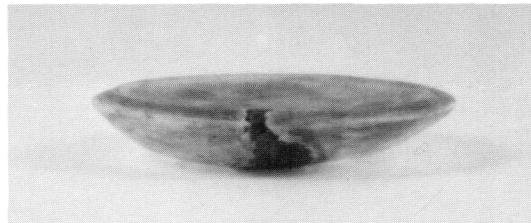
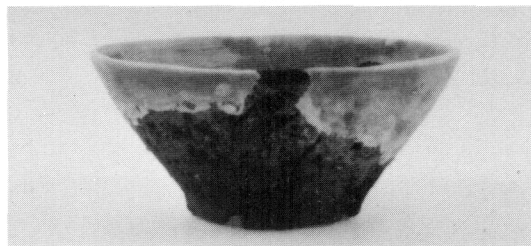
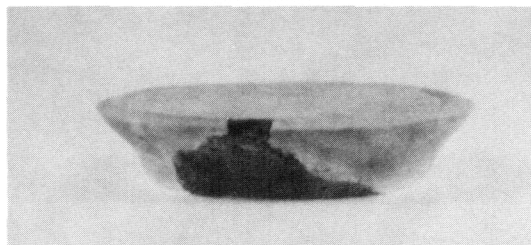
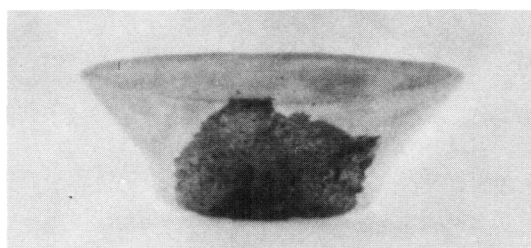
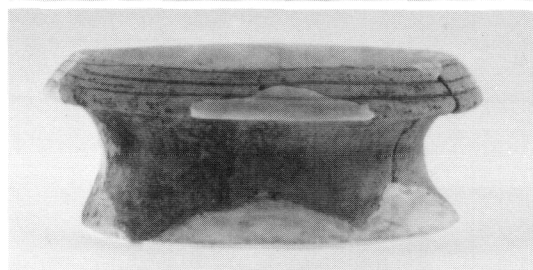
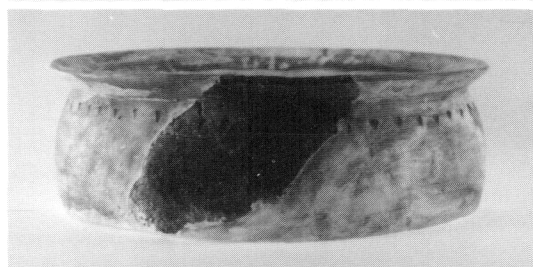
(1) H-19区3号土壙出土遺物



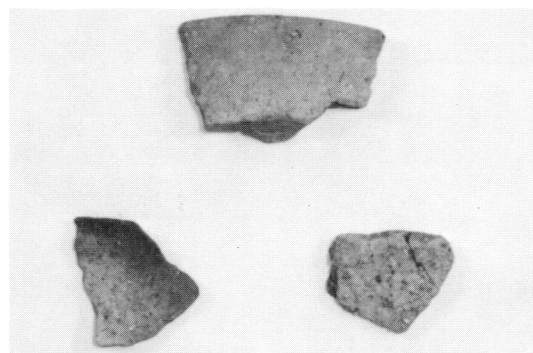
(3) H-16区溝6出土遺物



(4) H-19区溝5出土遺物



(1) H-19区溝5 出土遺物



(2) J-19・20区溝3 出土遺物



(3) J-19・20区旧河川跡出土遺物